# 家庭雜誌

## 第四拾四號

○咳嗽及風邪○は病の初候なり次に來るものは肺臟の衰弱にて身幹を憔悴せしめ最後に彼最恐るべき肺病の萌芽を顯出す彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓は能く咳嗽及風邪を豫防し肺臟を强くし活力を與ふる事實に驚くべし

世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を增し滋養分ある食料品として諸君に薦めなす

此乳菓の洪大なる滋養分は嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すると實に偉にして且彼等は乳菓の滋味を喜ぶものなり

○賣捌所は全國到る所の藥舖にあれば就て御試用を乞ふ



横濱廿八番
神戸十七番
米國貿易商會

○血液○は常に十分ありて且つ病毒なきを請合べきが本性なり貧血症なるものは唯滋養分なき血液より發るものにして瘰癧は即ち病毒の萌芽を顯すものなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓は能く血液を富まし且つ純潔にし又貧血瘰癧其他凡て血液より發る諸症を豫防し凡て身躰を養ふに必要なる血液を造るものなり

世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を增し滋養分ある食料品として諸君に薦めます

筋肉の減少は滋養分欠乏の第一の徵候なり此の如き場合に於ては必ず此乳菓中に多く含む所のもの即ち衰乏たる精力を恢復し凡ての病症を豫防に必要なる成分を要するものなり

○賣捌所は全國到る所の藥舖にあれば就て御試用を乞ふ



横濱廿八番
神戸十七番
米國貿易商會

# 國民新聞

看よ國民新聞**新年大附錄**看よ

我國民新聞の進歩は一歳を加ふる毎に駿速にして且つ健確なるを見る殊とに日清戰爭なる試金石は我國民新聞を琢礪して高く他新聞の上に標識せしめたり新年祝すべし而して今年の新歳は殊に以て祝すべし一は我日本が遠く世界に雄飛せるが爲め二は我國民新聞が最も健勝なる地位を社會の部面に占領せるが爲め何を以て祝せん國民新聞は新年に入りて三日間左の附錄を添ふ

## ◎丹陽白鶴(新年一日の附錄)

右は久保田米僊氏廣島大本營御前にて天覽に供し奉りたる揮毫の縮圖なり筆勢雄健光彩爛發せるは改めて呶々を要せず

(色刷り本紙大)

## ◎實用年中行事(同二日の附錄)

都會の事あり田舍の事あり四時折々の執業便覽其他百般の行事を叙し俗となく雅となく坐右缺く可からざるの便利なる小冊子也紙數六十餘頁久保田米僊、米齋二氏の繪畫十有九箇を挿入す

## ◎廿七年の歷史(同五日の附錄)

廿七年の最多事なる年たるを知るものは廿七年史の最も必要記臆すべき歷史たるを知らむ國民新聞の特色たる公平明亮の觀察に成る此歷史は政治、經濟、社會、文學、外國の五目より成る

**右三日間紙數特に增刷に付き廣告原稿〆切は新年一日分は來る廿五日、二日、三日分は來る廿八日、五日分は一月二日とす**

東京々橋區日吉町

**國民新聞社**

## 民友社發兌書目

一年中の好意を表すべきクリスマス。一年中の疎情を謝すべき歳晩。一年中の祝福を願ふべき新年は、將に來らんとして門に待てり。暖爐を擁して靜に讀み。青燈を剔つて快く誦すへき此等の書籍は又た、應に人に贈りて、その好意を表し、その疎情を謝し、その祝福を願ふに足るべき書籍なり、何んぞ把つて一本を備へ、又た更に之をその好む者に頒たざる。

十二文豪第八巻

山路彌吉著

### 新井白石

定價十八錢　郵税四錢

著者の白石に於ける殆んど半生知己の感あり。銳利の眼、明快の筆を以て這老の一生を畫き來る。固に痲姑痒を搔くが如き者ありと曰ふべし。

偉人の一生は、人をして觀感興起せしむ。人若し一本を座右に備へば、乃ち朝夕彼と相見る也。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

---

十二文豪第一巻　**カーライル**　平田久著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第二巻　**マコウレー**　竹越與三郎著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第三巻　**荻生徂徠**　山路彌吉著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第四巻　**ヲルヅヲルス**　宮崎八百吉著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第五巻　**ゲーテ**　高木伊作著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第六巻　**エマルソン**　北村門太郎著　定價拾八錢　郵税四錢

十二文豪第七巻　**近松門左衛門**　塚越芳太郎著　定價拾八錢　郵税四錢

爾後出版の書名幷に著者人名は左の如し

『賴山陽』……德富猪一郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『トルストイ』……德富健次郎
『ユーゴー』……人見一太郎

塚越芳太郎著

再版 十二文豪 第六卷

# 近松門左衛門

肖像自筆入
定價十八錢
郵稅四錢

◎德富一敬先生は讀て『傳聞元祿文明事。始看詞林爛熳華。擧世無人認水鑑。笑投戲劇談生涯』の語あり◎經濟雜誌は評して『近松門左衛門が戲曲家としての性情を抽き出だして餘蘊なきが如し此種の文學に嗜好なき余輩すら讀んで巻を掩ふ能はざるに至るものは文章の妙にして批評の奇警斬新なるが故なるべし』の言あり◎山路愛山氏は『眞に此老面目躍若たりと可申候』といひ『氣韻に富みたる御文躰春煙秋雨の如く人をして綿々の情を惹かしむる所いつもながら感佩仕候何事も露骨ならざるは尊兄の御特色と乍憚奉存候』等といへり◎大坂朝日新聞は曰く『子が其傳記以外に近松を描出せんとしたる手腕に至りては決して平々一樣の看をなすべきにあらず通讀の際人をして轉々子が冥想暗索の餘に醱勃たる神意が時に近松の靈氣と相觸着せるが如き妙境に會することと少しとせず近松が社會的戲曲を以て日本人を代表したりといひ史的戲曲を以て日本人の理想を代表したりといふが如き其の眼鋭紙背に透るものゝ殊に近松の花たる文章の咀嚼と其實たる理想を人生、男女、社會、道德の諸面より一々其證例を示して斷定を下したるが如き其精苦最も得易からざるもの』と◎大坂毎日新聞亦云ふ『彼の詩人的生涯を前後の二半生涯に分ち更に之を四期に分ちて第一期を普通修業時代第二期を高等修業時代第三期を得業時代第四期を成熟時代とせり蓋し其額を得たるもの歟其史的戲曲と社會的戲曲とに大徑庭ある所以を論じて社會に對する彼の境遇は彼をして史的戲曲に於ては彼の筆を狂ぐるの已むを得ざらしめたる所以を論じ社會的戲曲家たる彼は眞成の彼にして史的戲曲家たる彼は眞成の彼にあらずと說破する所議論明晰些の餘蘊なし思想界に於ける彼を論じて其個人想と社會想との一致したる者之を人生最大の喜悅として取て以て喜戲曲の料となし其個人想と社會想との一致を希企するの極却て互に相抵觸し遂に爲に個人の現存在を破碎するに至りたるものゝ之を人生の聖大なる悲痛とし取て以て悲壯戲曲の料となしたりと說く處明快巢林子蓋し地下に首肯すべし其文章は民友社一派の獨得なる流麗愛すべき文字多し』と◎自由曰く『著者は門左衛門に於ける徹頭徹尾温かき同情を其流麗なる筆に注でいと殊勝にものせられたり此筆を以て此人を叙す一讀直下趣味自ら掬すべく兎にも角にも門左衛門たる面目は二百餘年の今日新なる花を彩りて一般世人に喜ばるべし』

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

## 後編 日清軍記

定價 金十五錢 郵稅金四錢

十一月廿五日 初刊

後編日清軍記は筆を**山縣大將入韓**に起し**最近戰爭旅順占領**の**勇擧**に**收**む章を重ぬる七十有二寒夜爐を圍んで之を讀む悲壯起て舞ふものあるべし雄烈鬼神を泣かしむるあるべし艱苦嘗盡の狀覺へず衣を脫するものあるべし第一の軍記に光彩を放ちたる筆は後編に至り更らに萬丈の光焔を發しぬ**米僊、米齋、金僊**の**實見實歷畫**此間に**挿入**せられ層一層段一段の光輝を添ふるもの其數三十有餘箇眞景躍如たり活如たり

## 第一 再版 日清軍記

定價金十五錢 郵稅金四錢

**端を東學黨の亂に起し平壤の大勝に終る**日支衝突の事情、京城の小戰、南洋艦の海戰、成歡の凱旋、平壤の大勝、海洋島海戰、朝鮮の風物人情に至るまで歷々掌上に見るが如し、其文は平易流暢にして**恰も太平記を讀むが如し**特に**久保田米僊**及**米齋**兩氏が獨特天縱の彩筆を以て親しく其警眼に映ずる所を描き**繪畫數十**を挿みたれば、此種の著述多しと雖も其正確にして趣味あるは此著の右に出るもの稀ならん。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

社告

家庭雜誌は凡て前金に非ざれば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵券代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割增

## 家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊　金五錢　郵稅地方共　金五錢五厘
半年（十二冊）前金五十錢　金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局


本社電話番號七十番

發行兼印刷人　有馬俊彥
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十七年十二月二十五日發行
家庭雜誌第四拾四號

# 目錄


米齋

（明治廿七年十二月廿五日發兌）

## 社説

### 家庭の談話に就きて

家庭の談話といふもの些細なるとの樣なれども國にも家にも大關係ある者なり。祖母が愛孫の爲めに爐邊に物語りする猿蟹合戰、桃太郎遠征の物語りは直ちに國民の性質を造る者なり。三歳兒の魂は百まで失せず。雀百まで躍り忘れずとは眞に不磨の格言にて幼き時に吹込まれたる精神こそ、たしかに其人の品性を形造る者なれ。

生業に間隙なくして朝より暮まで親子團欒の樂しみなきものは談話の快味を知らず、談話の利益をも受けざる者なればかゝる家に生長したる小兒の智識は自ら狹隘なる者なり。これに引かへ家に餘りの時ありて家内靜かに相語るの機會多きものは小兒等も自から色々の事に通ずる者なり。されば談話なき家庭は敎育なき家庭なりといふも可也。善く語る父母を有するの子孫は眞に幸福なりと謂つべし。

此理を合點したれば、父母たらん人は注意して談話の種子を蓄へ置くべし。物に觸れ事に方りて小兒の心を啓發すべき談話を工夫し置きて折を見て之れを話すべし。これは造作もなきとのやうなれども中々六ヶ敷ものなり。若し敎育書など讀み得る人なれば、これをたよりにして工夫すべし。新聞雜誌なども談話の種子になると多ければ心して讀み置くべし。それも唯己れの心を滿足する爲めに讀まず、小兒に面白からんものを求むべし。人誰れも愛子の爲めに衣服を買ひて與ふるとを吝むものなし、まして愛子の心を養はんが爲めに

談話を蓄ふるに時を惜しむの筈なし。
談話は相互ひの者なり。聞くものにも自から話すやうにさせるは談話の秘訣なり。小兒の爲めに談話を蓄へたらば小兒よりも談話を聞くやうに奬ますべし。世間の父母の中には小兒の話をたはいなき者、うるさき者に思ふて顧みざる者多し。甚だしきに至つては小兒に物を尋ねられて憤怒し、たゞ〳〵其沈默ならんとを欲する者あり。去りながらよく〳〵思案せよ。たとへ大人にはたはいなきとなりとも小兒には大切なるとなり。大人には囈語の如く聞こゆるとも小兒には全心を込めたる發明なり。這へば立て、立てば歩行めといふは人の親の心ならずや。此心を推して小兒の心を躰恕せば少許の發明なりとて小兒だけの發明は褒めて之れを奬ますが親たる者の情にあらずや。されば獨り小兒に談話を聞かするのみならず、小兒の談話を聞くとは小兒を長養するの道なり。默坐澄心などいふ禪坊主の如きとは小兒に敎へずともよろしきとなり。
日本は言魂のさちはふ國とて言語の發達したる國なりと曰はれたれど中世より儒佛の敎入來りて儒敎は言に吶にして行に敏なれと敎へ佛は狂言綺語を誡しめたれば、口利くとは輕薄者流のすると思はれて談話の上手なるは人品を下ぐるやうに言はれたり。されどとは大なる誤解なり、人若し其心に思ふ處あれば語言の上に現はれざるを得ず、既に語言の上に顯はるれば成るべく人に分り易きやうにしたき者なり。孔子も辭は達すと曰へり。辭もし意を達すれば既に其上乘なり。父母もし幼子に徹透する程に語り得ば父母としての談話は既に十分なり。
敎育は目より入る者よりも耳より入る者多し。家庭敎育に心ある者此理を顧みて可也。

## 科學

### 雪と氷（一）

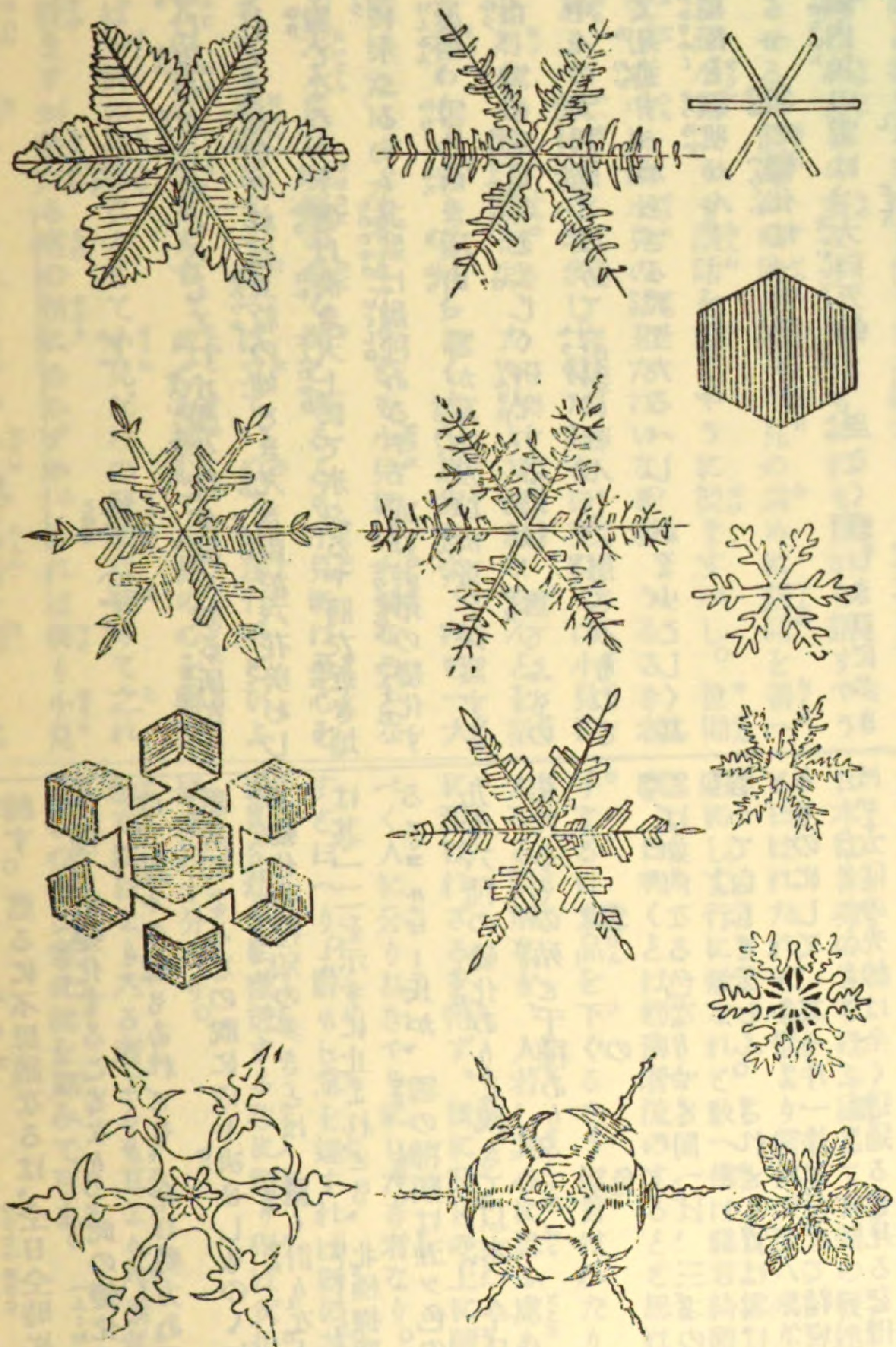
雪は雨の氷し者なることは小學生徒も能く知る所なりされども如何なれば豆粒の如き丸き雨が六花美わしき雪となるや？雪は高き天上にて氷ふるや將た近き地上に氷ふるや？其狀は幾種あるや？或は其形の變化する原因、雪の白き理由、雪が草木及び禽畜を保護する理由、雪の重量等を委しく研究する時は、雪てふものは中々の大問題となりて容易に輕んじ、慰さみものとして見逃すべからざるに至るべし。いま少こしく其の概略を説明せん。

#### 雪の變化は一千種あり

我國內地の雪は、大概天曇り、風なく寒むき日に多きとは人々の知る所也。何れの國にても、通常內國の雪は、風靜かなる日に、地上を去る遠からざる所にて氷結す。然るに不思議なるは、全日全時に降る雪にして、形種々に變化することなり。此の變化の理由に付きては、種々の說もあれども、今日勢力ある說は、溫度の差異によるとの說にほゞ決せしもの丶如し。兎も角も、其變化の種類の多きとは、驚く計りなり。左に示せるは其一二を示すに止まれども、北極探驗者として名あるスコルビー氏が、雪の種類は五ッ色の大綱の下に、九十六種の變化ありと說きて以來、今日に至る迄計へ得たるもの殆ど千種あり。

#### 雪の色

雪は如何なる色なりやと問へば、三才の童兒も即時に答へて白しと云わん。されども實は雪は色なき透明なるものにして、其一片一片に付きて精密に觀察する時は、太陽の光線は全く透通るを見るを得べし。されば何故に白き色を顯はすやとの不審は氷によりても明か



雪花の形

に説明し得べし。桶の上部に張りたる薄すき氷を通して、桶の中を見る時は、容易すく桶の底を見るを得べけれども、氷の厚さ重くなるに隨がひ、その透明は漸やくに減じ、遂に何物も見へざるに至る。こは氷りのみにかぎらず、硝子の如き透明のものにても、水にても、同じ經驗は常に見る所也。

凡て色の白くなり、赤くなり、青くなり、黒くなるは、物の厚薄の差によりて太陽の光線の反射に差異を生ずるより起るが故に、雪の花瓣の厚薄は、思ひ／＼の色を反射して、七色集まれば白くなるてふ理學上の原理に原き、かくは白く見ゆる也。夏時氷水を飲める人々は、手近くその例を見給ふべし。透明なる氷の一片を取りて鉋に上せ、でし／＼とかける下より出づるものは、もはや初めの透明なる物にあらずして、白き雪の如き觀をなす。鐵瓶の口より出づる蒸發氣も、その色とてはなき透明物なれども、積れば白雲とも黒雲とも見ゆると同じ理なるを知るべき也。

### 雪の重量と其結晶

雪の重量の輕きことは、綿にたとへんか毛にたとへんか、手の掌にすくひ上げし雪の輕やかなるは、殆どその目方あるとを感ぜざる位也。降雪の際、椽側に立ちて、靜かなる一呼吸を試みなば、容やすく軒端の雪片を吸ひ込むを得べし。之れを以てもその輕き度は推し計るを得べし。雪の重量は、昔へより種々なる法方を以て計りたるが、濃厚の差にて其の重量を異にすれども、平均するに二尺四寸立方の雪の重さは、百八十七ポンドにして、水より輕き事十二分の一なり。

凡ての物は、寒に遇へば結晶して小さく重くなるに、獨り雪と氷のみの輕くなるは疑わしきに似たれども、雪と氷は中に空虚の所多くして、空氣の滿つると多きとに心付かば、直ちにその疑問はとくるを待べし。雪の結晶する理由を委しく說かんには、むつかしき磁石

論に立ち入らざるべからざるも、一言にして之れを云ば容易に解し得らるべし。

今ま一本の磁石あるときは、鐵の小片はパラ〳〵とその西端に群集附着すべし。然るに玆に多數の磁石力ありて、又た歪みなき無數の水分子空中に飛散せりと假定せよ。その結果は如何になるべきや？磁石の抵抗力と抵抗力とは、互ひにおし合て相離るゝと共に、吸引力と吸引力とは、互ひに相引き合ひて、一ヶ所に集合し、花の如き松葉の如き種々樣々なる形を作る也。

さるにても各々の花片が、六つか八つかの度を正しく保ちて、少こしも違へざるは、不思議と云はゞ云ふべきものなり。されども之れに類するものは他にも多くあり。雪の六花を怪しむ時は、我等が日常欠くべからざる鹽も亦た怪しむべきもの也。注意して鹽の一粒々々を細視せば、見出すものは四角なる箱の如き形の物なり。甚だしくかき亂したる鹽にては、明かにその結晶を見るを得ざれども、手近かく試驗せんと欲する人は、梅漬の酢を持ち來りて、皿に入れ、日光に晒すべし。燥きたる後に見出だすものは、大なると小なると好み次第の小箱なりの結晶也。大なるは一分以上もあり小なるは肉眼にて見兼ねるもあり。水晶を見給はずや、各々六角をなして違へず硫黃金剛石も亦た一定の形を備なふ。如何なれば各々一定の形を保ちて違へざるかは、未だ人智外にありて、學者が腦を絞りつゝある問題なり。

## 雪の價

雪の代價を金錢にて定めんには、天地の經濟社會にては非常の高價を有せる物品なるべし。その功用は一々算へ盡くさゞれども、北緯七十八度二分の一にランセラー、ベーと云ふ所あり其の處にて雪の溫度を計りしに、空中にては零度以下三十度の酷寒の時に、氷の下二呎の所にては、僅かに零度以下八度を下らず、四呎

の下にては零度以上に上りて二度となり、八呎の下にては二十六度の温度となり、僅かに氷のはる點より六度の下なるに止まらざりき。之れによりて知るべし南北兩極の憐れむべき植物が、健康なる人間をさへ凍へ死せしむべき氷寒に、僅かの生命を保つのみならず、青々と繁げ盛ゆるを得るは、全く雪の功なりしとを。南北極の獸類が唯だに氷死せざるのみならず、食物なる他の動植物に欠乏せざるを得るも、雪の外に得べからざる所也。かゝる保温の大功あるは、未だ少數の人々によりて利用せらるゝに止まるは、遺憾なるが、雪のために大なる利益を受けつゝあるは、近來の歐洲の植木屋や。彼等は何がな奇らしき植物を集めて、人目を引き寄せ一と儲せんと、力を盡くし遙かの熱帶地方よりわざ〳〵奇らしき植物を取り寄せて、養ひ置くに、夏は青々と美くしく繁りたる植物が、如何に手を盡くし工夫を凝らすとも、一と冬にして枯れ失せ、辛苦全く水泡と化すると年々なりしが、近來種々なる法方を考へて、雪の小舍の中に置きしに、最も好く生長して、始めの失望は全く回復するに至れりと。さるにても、冷たき極度として例へらるゝ雪が、如何なればかゝる温度を保つやと問ふに、毛織や綿の温かき道理を知る人は、即時に答へ得べし。毛も綿もそのもの自身は元來温たかき者にあらねども、毛の間には空氣ありて身躰より發する熱を外に去らざる様保つが故に、温を感ずるなり。かくの如く冷たき雪も片間に含まれたる空氣は、地中より發する熱の去るを保つが故に、温かきなり。故に雪の重量の一定せざるも、たゞ空氣の含む度合の多少によるもの也。

雪はたゞに温度を保つのみならず、山上の濕氣が下に〳〵と吸ひ下げらるゝに當りて、常に濕氣を保たしめ、植物を保護するは雪に如くはなし。平地にありても又た欠くべからざる川源となりて、山間の避地に人に知

れざる慈善事業を爲す。寒國に生れし人々は他に大なる功用のあるを知り給ふべし。北海道の冬の事業を見れば、殆ど全く雪の力なりと云ふも大言ならざるを知るを得べし。彼の數百年繁殖したる大木の、人の力にも馬の力にも動かし得ざるものを動かすには、雪の上をすべらすの外なきにあらずや。ロシヤにても毎年雪の降るを待ち兼ねて、黑海及びバルチック海等の方角に滊車を通じ、他の時に運送し得ざる荷物は、寒中に運搬するを常とし。北部歐羅巴のラプランド人、グリンランド及び北亞米利加のエスキモー人が、雪車を驅りて最も多くの事業を爲すは寒中なり。カナダの人に問ひて、御身の最も面白き時候は何時に候やと云へば、大人も小兒も口を揃へて答へん。雪車にのり氷靴を穿ちて遊び得る時候に勝るものは候はずと、もし夏時に於て高山に登る人々が、山上より溶けて流るゝ雪水なく、雪のため濕ふを得て靑々と繁れる草木なき時は、如何に憐れなるぞ、蓋しその不幸は他に比らぶべきものもなけん。されば雪の功用はかく計り大にして少しの害なきやと云ふに然らず、天地間には正しき規則ありて、功の大なるものは其害も亦た小ならずとは、逃るべからざる規則なれば、雪の大功あるに連れて、甚だしき害を崇むるは又た免れざる所なり。如何なる害あるやは次號に於て説く所あらん。

# 文藝

## 家鄕への書信

湖處子

前略御免可被下候、過日安着之報道、端書を以てポースト氏に托し置き候へば、定めて御落手之事と存候。」自分發程の當日、甘木に着きしは既に午後二時過にて候ひし故、迚も五時の滊車には間に合ふまじ、斯くて

上京り玉はゞ、また四五年は逢ひ見るまじければ、是非一泊の上、明朝ゆる〳〵と發足せらるべしと、叔夫婦懇切に留られ候へば、餘儀なく一泊する事に決し候、間もなく杯盤運ばれ候。

酒の上にて、福岡まで送り玉はずやと、冗談の如く叔父に申し候處、叔父も亦冗談の如く、是非福岡まで送るべしと答へられ候、翌日結束して別を告げ候處、叔父は眞面目に、待ち玉へ我も福岡まで送るにと、何やら冗談から眞實が出で相なる故、益なき事と止め候へども、聽かれず、他に用事もあれば、旁々福岡迄は是非送るべしとて、着替など命ぜらるゝに、自分は漫言人を煩はすを悔ゆると共に、意外なる伴侶を得たるを喜び候。

自分は他に訣別する友もあれば、途中にて逢ふべしと一歩先に出立、別るべき友に別れ、さて囘顧囘致候へども、叔父の影未だ見えねば、一歩一顧、進むとなく、進むほどに、甘木川まで來り候。猶ほ叔父を見ず候へば、橋頭の一軒家に立寄りて相待ち候。橋頭の一軒家とは、歸省の際、車夫と談判致し候かの一軒家に御座候。相變らず想好しの婆様、紅の樣な茶を汲み候。

茶店に寄りて、茶ばかりも呑んでも居られずと、好きの樽柿をカジリ居り候處に、叔父は大急ぎにて橋を踰えんとするを、後より呼留めて、玆處より同伴致候。

歸省中の雑感など、叔父に語りつゝ、發程以後絶えず胸中に往來する離愁を、逐ひ遣り居り候處、未だ一里も行かざるに、叔父の途上知人に邂逅し、暫らく立談しつゝありしが、急用の生じたれば、殘念ながら一歩後るべしと申され候へば、本意なく元の一人旅に復り候。

「萬里路長在」自分が此の道を東過すると既に四回、然して吾身今も猶ほ昔の如し、之を思へば、萬感蝟集、足も念ふに進み兼ね候。

三番滊車に向つて、二日市停車塲に急ぎ候處、猶は半時間も早かりし故、茶店にて待ち合せたるに、叔父も續いて腕車を驅つて急ぎ着かれ候。僅かの時間の差なれば、直ちに追つ付くべき筈なるにと申され候故、自分も滊車に後れんかと車を走らせ候と答へたるに、大四九尻と、大笑に相成候。

再び打ち連れ、停車塲の線路を踏み切つて、久留米より來て三番滊車を待ち候。此處まで來れば、故鄕の山影を沒し候て、唯適かに高良山を望む而已に御坐候。」

間もなく滊車に乘り、面前の寶滿山を移る時雨を見候、餘所の時雨を見る間に、客車の左右、赤夕陽一霎の雨と相成候。

博多停車塲より下れば、茫々として日は暮れかゝり候、福岡の（余が妹婿の家）は今も武士臭き四角屋なれば、手土產にと、仇路して金米糖の一箱も購ひ、捷路を反圃に取りて警固村に向ひ候。警固に到着したる時は日既に暮れ居候。

# 亡き祖父

近衛師團　松琴生

思ひ出だせば、はや三とせの昔となりぬ、吾が召に應じて兵營に入ることゝなりし時、とりわきて、我心のほだしとなりしは、げに祖父の上にてありき、祖父は七十の上になほ五つを重ねたる齡なるに、中老の頃より「ローマチス」と云へる病ひに侵され、近き頃には慢性となりてたちゐさへ儘ならぬ身となりたまひぬ、長き病に肉落ち骨立ち色あせて姿さびしく、梢に殘りし枯葉の如く、嵐し誘はゞもろくも散り行かん風情なりき。

一たび兵營の人となりなば、三とせの間は如何なることのありとも、故鄕に歸ることのかたしと聞けば、三

とせの後ならでは再び相見んたよりもなし、さわれ祖父の今の有様にて三とせはおろかなほ幾月をかさゝへ得らる可き、吾れは此度の別れを永訣と思ぬ、されば入營前二た月程は、朝夕祖父の病床に侍りて仕へまいらせたるも、是れが最後のつとめと思へば、眼にふれ耳に聞く、物事なべて涙の種となりぬるもあわれや。

涙の月日はいつしか過ぎて、今日出立と云へる曉きにいたりぬ、兼てより心定めし上ながら、もろくも亂るゝ思ひは千々に、晴れたる空もおぼろげに見えて、袖に置きそふる露の玉しげし、朋友村人の祝ひうたふに、うはべは勇ましく裝へども包みかねたる思ひはいつかは色に出るめり、時は來りぬ我は祖父にいとまを告げえぬ、祖父はからくも床に起き直りて、「ソナタも身をつゝしみて皇國の爲めにみごとつとめ、つゝがなく歸れよ」とて兩頰に流るゝ涙をやせたる手にて拭ひ玉ひぬ、時過ぎぬと促がされて立ち出でしが、祖父は吾れを送らんとて儘ならぬ身を漸くに起こして、弟の肩をたよりに門邊迄送り出で玉ひぬ、つなぎ止めらるゝ如きかたききづなを、よふよふに思ひ切りて、刈田の細道たどり、淸き小川の流れを渡りて、我家の方を振り返へれば、祖父はなほ門の柱にもたれて、名殘り惜し氣に見送り玉ふ樣、送れる人を憚ばかりて涙見せじとくひしばる胸のくるしさ、十町も來りしと思ふ頃も、なほも名殘の忍ばれて跡見返ればあなうたてや立ち並びたる小松の林は心なくも我家を蔽ふひぬ。

在營中は折々たよりして、祖父の消息をたづねまいらせしは、其年もくれ新玉の春をむかへ待たれし梅櫻もいつしか散りて、靑葉がくれに、時鳥の名のる頃となりても、病に變りなしとの知らせに、思ひ絕えてし望みのつなを、空だのめにもつなぎ止めて、再び見ゆる時もがなと指折りて數へしこともありき、神に祈りを

捧ぐる時も必ず祖父の健全を願はぬ事とてはなくかくて我願ひの萬一にも遂げらるゝことあらば、我は無上の幸福と思ひぬ。

其年の秋の初めに、大演習の爲めにとて、武藏より下野に入りぬ、佐野の渡りの夕暮に露を宿りとし、奈須のゝ原に晨たの霜をふみ、鬼怒川の流れに嗽き、男體山の朝風に櫛りつ廿日計り過ぎて月の終りに營所にかへりぬ、あくる日は慰勞の爲めとて一日の休暇たまわりたれば、程近きあたりに住まへる知己のもとをおとづれしに、知己はあいさつの言葉の終りに、吾が祖父の身まかりし悔みを述べぬ、吾は思の外の事に胸まづつぶれ、かついぶかりて其由を云へば、知己は始めて吾演習中にて、知らざりしを覺り「さては知らでゐたまひしか、まこと祖父ぎみは此月の初めつがたより、急に病重りて十九日と云ふに永き眠りにつき玉ひぬ」と始めて知りし祖父の訃音に、思ひは亂れ胸ふさがりぬ「年の上なればさもあるべきことなり」と何氣なき樣にて演習の事など打語へと、唯口もて之をかたるのみ、心は茲にあらで、涯りなきほとりに其たましひを逐ひ、故郷の新しき墓邊を彷徨ひたるならん、吾は何となく悲哀に滿たされて、何事も快からねばそこ〳〵に暇を告げぬ、宿りを出づれは覺へず涙は湧き來りて止めんすべもなし、營所にかへり机にふして默泣しぬ、朋友の其所以を問へども答へず、供へられたる膳も箸取らず、時來りて、臥床に入れど、心はひたすらに亂れに亂れ、幼き時の事、祖父の敎への言の葉、かつは叱られし時の事など思ひつゞけて、流るゝ涙枕に止むれとかひなし、眠らんとすれど眼はます／＼さえゆきて祖父のおもかげありありと見え、つひに一夜は涙とともに明かしぬ。

あくる日故郷よりのたよりとゞきぬ、げに祖父はくるしみもなく恰も枯木の倒るゝが如く安らかに此世を去

りたまひぬ、病の中にも吾が事は時々言ひ出でゝ「彼はまだ歸り來らぬか」との一言は此れ臨終の言葉なりしなり、そのなきがらも常にかわらで、さも樂しき樣に笑みませる如くなりしと。

ア、吾が祖父は此世を去り玉ひぬ、我望みもこゝに消えぬ、まこと人と生れたらんもの、尊きもいやしきも、いづれ仇野の露と消ゆ可けれど、さても親しき人の死別ほど悲しきものはあらじわきて百里の遠きにありて其最期にもえあわで便りの上に其訃音を聞き知りし時程悲しきことは又と世に非ざる可し、吾は祖父の訃音に於て深き悲みを知りぬ。

祖父の世を去り玉ひしより、こゝに二とせの春秋を過ごせど、晴れまはりたる空、月清き夜、風吹くあした、雨降る夕、故郷の空思ふ毎にありありと胸に浮ひて消えぬのみかは、思のまさりゆくはげに亡き祖父のおもかげなりけり。

## 笛の音

いぬる夜一老翁のめしいなるが可愛なる一小女に手ひかれつゝ、按摩の笛、たえ〴〵に吹きゆくを見て、いとゞあはれの堪へがたければ。

空花生

ふけゆくよはの　巷より
かすかにひゞく　笛のこゑ、
うきよをわたる　人の子の
うたとしきけば　あなあはれ。
ひたひによする　年波に
いくよの秋を　ちぎりけむ、
枯れおとろへし　老の身の

覺束なくも　みゆるかな。

兩眼ともに　うつろひて
　足のみたどる　世のちまた、
てびく小女のわどけなく
　やさしきさまも　あはれなり。

こゝろの底に　てりわたる
　天つひかりを　たよりにて、
ゆくとはいへど　あはれなれ
　暗じをたどる　その思ひ。

笛にいのちを　ふきありく
　しらべはたえて　かはらねど、
身をさす風に　いくたびか
　きゆる思を　うたひつゝ。

かくてさへゆく　笛の音に
　よはいやふかく　しづまりぬ、
うき身を闇に　うつたふる
　こゝろをよむは　小女のみかは。

# 家　政

## 家庭の教育

### 注意力を養ふと

注意力を養なふ必要は、人躰に例ふれば心臓の如く、木に例ふれば根にも似て、幹にも似て、最も教育上の欠くべからざる問題也。

木の枝一本の流れ來たるにも、心を止めて忽がせにせざりし故に、コロンバスは大陸發見の大事業を遂ぐるを得たり。上より下に落つるは、通常の道理の如くに、

人の輕視する問題にも、心を留めしニユートンは、引力の大原理を發見し、幾千年來同じ仕方に吹き上がれる鐵瓶の蓋に、注意ある目を留めし計りに、ワットは便利此よなき蒸氣を發明し、大と小との別はあれども、細微なるバクテリヤを見出せし人も、重寶なる諸器械を發明せし人も、唯だ一の注意力ぞ成功の秘決なりき。
若し我等が一層注意の目を開きて、身の周圍に横われる事物を詳らかに見る時は、發明すべき材料は山の如く、發明するに便利なる場合は海の如く多かるべきなり。注意力の必要は、かくの如く大なるが故に、幼兒のときより、周圍に無益なる有害なる物品を置かずして、注意力を徒づらに費やさしめ、且からざる記憶を與へざるは、父母たるもの丶第一の勉めにして、長ずるに隨がひ注意力を引き起すも、亦た忘るべからざる問題なるを知るべき也。

## 注意力とは何物ぞ

注意力とは一時に萬事に心をくばる、所謂氣の付くとを指すにあらず。熱心に一物の中に心も身も入れて、其物一個に心をくばる事を云ふ也。故に或る學者は、むづかしき算術の問題を考へつゝ、家に歸るの途、家の有りかを忘れたりと云ひ、熱心なる畫工は、夜中夢中に難畫をかき盡くせりと云ふ話しあり。眞に注意とはかゝるものにして、外物のために心を動かされず、內心に浮ぶ想像のために束らるゝこともなく、全く心を之れに打ち込むにあり。注意力深ければ、隨つて推理力もたしかになり。記憶力も強くなり、反省力も盛んとなり、注意力少なければ、物を見れども何の觀察する所もなく、聞けども何の感ずる所もなき白痴の如きものとなる、故に少さき時より注意力を養ふことは、最も必要なるは、然ることながら、童兒は自然の生理上、常に運動するの必要あるものにして、一途に一事に凝る能わざるものなれば、強て端座し兩手を動かさ

らしむるは、健康に宜からず。たゞ生長して後迄も、氣儘に身動き爲して、一物に注意する能はざるの癖を付けざる樣、少しづゝ舵を取ることを勉むべし。

如何にして注意力を引き起すべきか

小兒の注意力を起さしむるの必要は、已に明かになりたれども、いかにして之を引き起さんかと云ふ法方の問題は、輕視すべきことにあらず。若し強て之れが習慣を付けんと、いらちて大聲に叱かる計りになれしむる時は、所謂耳が章魚となりて、少しのことには、更らに注意し得ざるに至るべし。

さらば如何にしてその心を動かすべきやと云ふに、時に色美わしきものを見せしめ、或は變化ある音聲を聞かしめ、或は休息を與へ又たは好奇心を起さしめ等して、注意を引くことを勉むべし。然れども餘り刺激することゝ一方に力を盡くす時は、左なきだに轉り易き氣質をして、益々轉り氣と爲さしむるの恐れあれば、適宜に一定の課業もしくは事業に付きて、考へを廻らしむることを習はしむべし。一定の業を爲さしむるに當りて、初めは甚だ困難を感ずべし。そは快活なる童兒は、中々一物を長く注意し得ざるが故に、五分か十分にして飽くべければなり。されども成るべく周圍を靜かにして、他の氣の散らざる樣たすけつゝ、漸次に思考の力を長く強くすることを勉むべし。

小兒のために最も宜からざるは、未だ物の道理や法則等の如き、難つかしく云へば抽象的の事の解し得ざる腦髓に、強て之れをおしつけ、何もわからざるに夢中に、之を暗誦せしむる等の如きは、一生注意力を失なわしむるの基なり。故に其の腦の未だ弱きものには、成る丈け實物に付きて、見易きものより之を敎へ、先づ感覺にて知り考ゆる事を第一に計るべし。童兒が敎へらるゝ物事に飽きたる樣を見る時は、父母敎師は強て之を捕らへて敎ゆることを爲さず、暫時休息と運動を

爲さしむべし。大凡の不注意なる小供は、運動によりて廻復し得らるゝものなり。

父母にかぎらず敎師にかぎらず、敎育の勉めあるもの、最も忘るべからざるは、童兒の思慮と工夫力を、成る丈け自發せしめんために、其年齢と腦力に適當せる問題を與へ、且つ之を考ふる丈けの時間を與へ、自ら工夫する迄は說明し聞かしめざるを宜しとす。父母や敎師が注入的に吹き込みたる事は、たとへ百の事を敎へたりとも、自ら考へ出したる十の事にも及ばざるなり。たゞに及ばざるのみならず、反て腦を害するの恐れこそある也。

小兒が一時に多くの事を記臆し、もしくは考へ得ざるは、恰もその胃中に多量の物を消化し得ざるに等しければ、成る丈け混雜せざる、關係近かき事を少しづゝ敎ゆるこそよけれ。大人にてもその經驗はあるとなるが、朝起き出でたる時、若しくは運動の後は、注意の力最も銳敏なるものにして、だん／＼おそくなるに隨ひ注意力のにぶるものなれば、敎育する人々は最も難つかしき勉强と見るものを其日の初めに爲さしむべし。もし又た考へを四方に散らし、一時に彼の年も此の年も考ゆる癖は、勉めて之を制し心を單一ならしむるヿを敎ゆべし。復雜なる考へを有すると、習慣となりては、成長の後も中々に直し難くして、注意力四散するの初めなれば、最も肝要なる事なりとす。

物事に注意深き人は、たゞに學藝事業に進步し成功するのみならず、極めて謹しみ深きが故に。所謂謹愼深き道德心高き人ともなり得べし。されば注意と云ふヿは、凡ての根本とも云ふべき、最も大切のヿにして、其道を間違へその法を過るときは、一生の不幸を來すを考へ、敎育の任あるものは、一時たりとも忽せにすべからざる問題なりとす。

# 新智識

## 燃料に一大進歩起らんとす

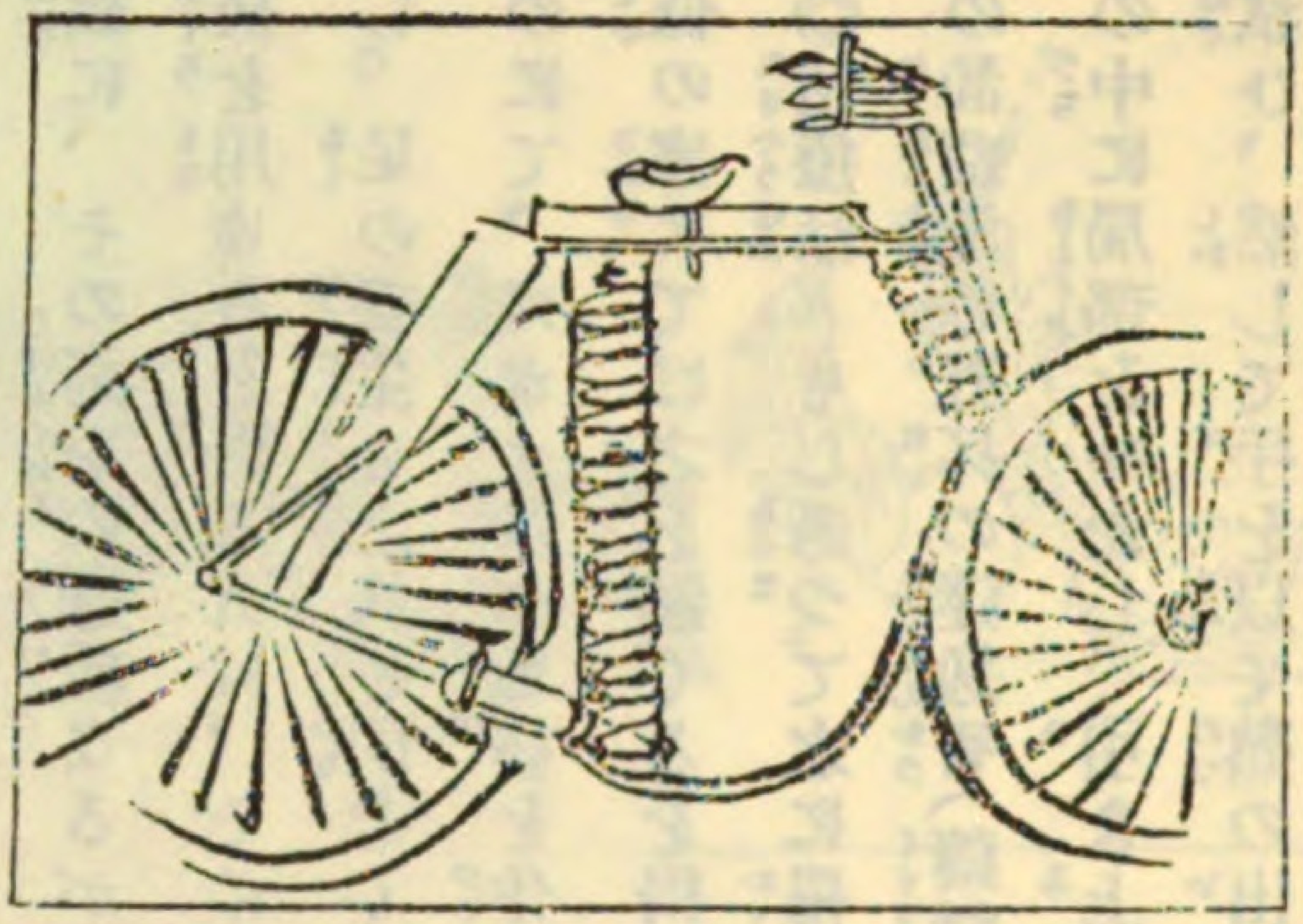
少しく器械學に心あるものは、當時工業用に使用せる、石炭の用ひ方の不經濟なるに心付かざるものはなし。今の用ひ方にては、石炭の火力は僅かに其十割を用ゆるに過ぎずして、他は悉とく烟突より烟となりて飛散するが故に、其全力を用ゆるの法方につきては、少なからぬ學者が毎日頭を垂れて考へつゝある處也。若し石炭を燃すに、當時の如き烟と火と混ずるが如き仕方ならずして、之を直接に電氣力に化するを得ば、その火力を全用して一大利益あらんとは、何れの學者も注目して考へつゝある處なれども、未だ是れぞと云ふ發明を聞かず。

然るに茲に一種の變りたる方向よりその法方を考へつゝある學者あり、アイオーアに住するノーブルと云へる法學士にして、且つ器械發明家の名ある人也。其人は通常火を燃す時に、パチ／＼と火のはねるより考へ付きし事にして、其考の通りに行かば、今日の石炭より、八九十割の餘計なる火力を利用し得、且つ使用に供せんとする道具も、今日のものよりは二十五割安價に製作するを得べしと云ふ。其法方に至りても、至極手輕くして、此の考へは已に或る事業のために實試中なりと云ふ。愈々實行に至らば工業社會に一大利益を與ふべき也。

## 進歩せる自轉車

ポートランドの學者、トンプレーンと云ふ人は、重寶なる自轉車を發明せり。已に水蒸氣の力を用ひて自轉する車はありたれども、氏の自轉車は、水蒸氣よりは少なき熱度によりて、四馬力の力を生じ、且つ一百哩の間は、難なく走るを得る便利なる車なりと云ふ。圖に示せるは即ちその車なるが、汽罐とも稱すべきは

僅かに一本の螺線状を爲せる短じかき銅の管にして、石綿を以て裹となしたる黄銅の箱の中におさめ、腰かけの下の所に安措せり。後車の兩側に附接せる管と、



喞筒はその濾管の上部に連なり、且つ手の持つ所にも連接して、舵を取るの働きを傳ふるに供せり。その管の外部は絶へず、氣罐より發する熱氣のために温ためられて、途中にて管の凝固せざるに供せるが、その熱氣は又たその管の中をも通りて、後の車脳に傳われり。此の外にも、蒸氣力を計る器械、及び管の弱りたるを回復する器械等も附着して、至極便利なる自轉車なりと云ふ。

# 寒中の養生

## 霜やけ

煩みに輕重の差はあれども、霜やけに苦しまざる人は殆ど稀なりとすふも過言ならざるべし。

◎霜やけの生理　霜やけは如何にして生ずるやと云ふとは、已に知れる人多かるべし。人躰の血液は常に温かく且つ巡環して躰温を保ちつゝあるに、血液の製造元となる心臓に、最も遠く且つその流通の分量も少けなくして、温度を保つに最も難き、手足耳朶の如き所は、外部の甚だしき寒氣のために、血液の温度を非常に減ぜられ、遂に殆ど流通の止めらるゝ迄に至る。然るに後よりおしかけて來る血液は、又たそこにて止められ、止まりたるものは凍り、又た後よりは來るゆへに、局部に漸く膨れを生ずる也。

◎其養生法　最も良き養生法を求むる人には、一言にて答ゆるを得べし。即ち豫防也。豫防法の第一は腕を温かく保護するにあり。腕を温かくする時は、腕より傳はり行く温かき血液に、手の先きをも温めらるゝが故に、その巡環の遲緩なるが如き事は少なし、殊に手袋を用ゆるを得る人は、その憂は更に少けなきを得べし。足の養生も之れと同じく、もんばの如き温かきものにて、ズボン及び足袋を作りて、之を穿つ時は、大低の寒にては之を避くるを得べし。

◎治療法　もし過つて之に罹るときは、茶わん一ばいの葡萄酒と五杯の迷迭香（藥舗にあり）を混和して、その中に局部をひたし、引き上げて後、燥きたる布にて拭ひ、然して手を以て熱の出づる迄、擦すること二時間毎に一回づゝ怠りなければ、大抵のものは一二日にして消滅すべしと云ふ。醫へたる後は、殊に四肢を温かく保護すれば再發の憂無かるべし。

それよりも倘ほ明法にして、且つ間違のなき治療法は『一斤の豫防は十斤の藥に勝る』と云ふ格言を實行して、事を未發に防ぐこそ最もよけれ。霜やけは中々固性のものにして、一度之にかゝる時は、毎年時期を違へず再發して、再び後をたゝんには餘程の骨を折らざるべからざれば也。

## 南京豆は如何に遊ばるゝか

南京豆が世界の人に遊ばるゝかを見よ、挿圖に示さるゝ鳥の如き「なめくじ」の如き、或は達磨の如き風采せるに南京豆にして先陣に進めるは烏帽子を被り双眼をつけ、鼻口を持ち、頭髮をはやし、外套をも着たる如きは「ピン」の二手、「ピン」の三脚を有せる先生なり、次なるは騎馬武者、腰は馬脊につゝりつけられピンの糸もて手綱をあやつるも面白からずや、次なるは豚の

如く次なるは小兒を携ふるマムマー、次は卵子を抱へ、て走る、次は棒をかつぎ、次は「ボート」をはしらす、凡





て「ピン」と糸とにて製し得らる、頑恐なる支那國に緣ある南京豆が世界の小兒に玩弄物となるも怪むに足らず、日清戰爭の今日小兒の遊戲には聊か趣味なしとせず、但し其遊びかたは糸に引くか疊の上に並べ、拳もて疊を叩きて一進一退或は蹶き或は倒る、早く目的の點に達するものは此道の勝者と知るべし。

## 手藝案内

### 種々の袋物

西洋にて自家にて製造する袋物の二三品を左に列記すべし。

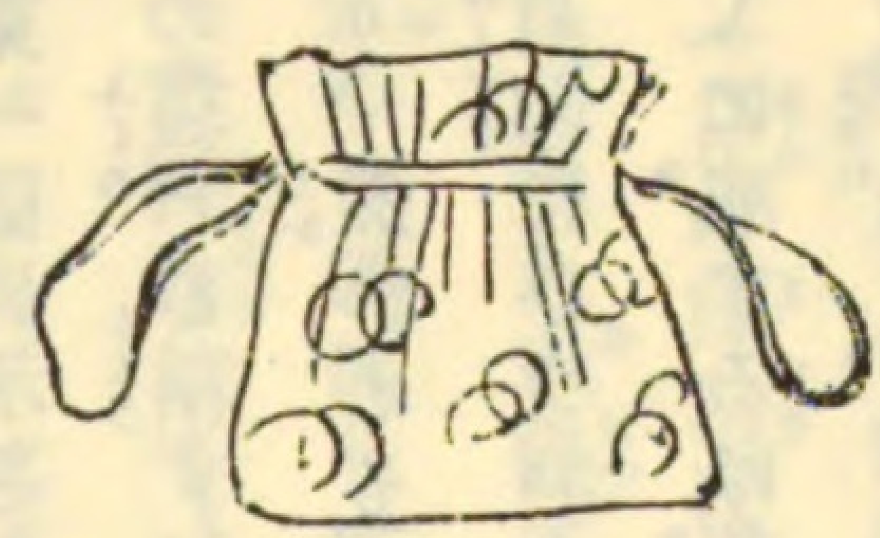
第一圖に示さるゝは「ラウンブライ、バッグ」（洗濯屋の袋）と稱す、日本にて「がつさい袋」に類するものなり、然れども「がつさい袋」なるものは腰にさげ、或は肩頭にひつかくるものなれば其形は大ならざれど、こゝに記するは英尺一ヤード半にて製作し、洗濯物などの汚穢を避くる爲にするものなり、布帛は何物にても

差支（なけれども、洗濯物の如きものを容るゝに用ゆれば差して立派ならずとも宜し。

先づ圖の如き袋を製し上端より二「インチ」下なるAは横に二條の縫取を施こし、布を巻きたる枝を置きて袋に（C）なる眞鍮釘（針頭の兩方にまがる）にて結びつけ、枝の端より二「インチ」隔つ所に二個の穴を穿ち、之に紐を通すやうにし、壁などに引懸くる便にするなり、これは隨分大形なれば大概のものは容るゝに足る。

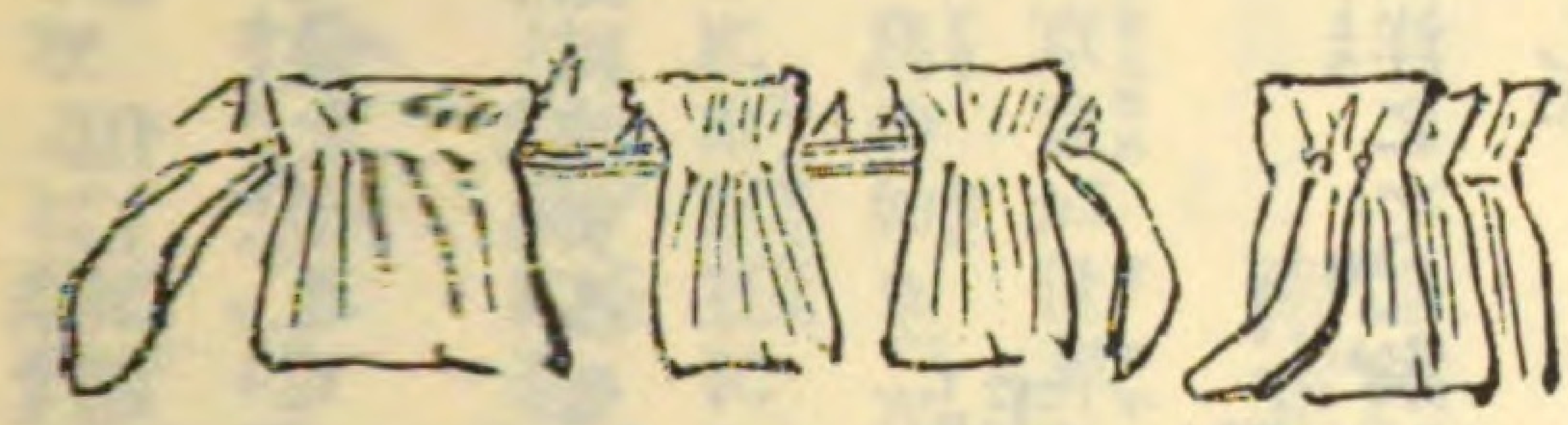

第一圖

第二圖は我が國にても能く行はるゝ錢嚢なり、これは別に說明するを要せず、唯だ紐を通す穴に紐二重に通し、兩方の輪紐を引けば容易に袋口を閉ぢ、指にて口を引けば容易に口を開くなり。


第二圖

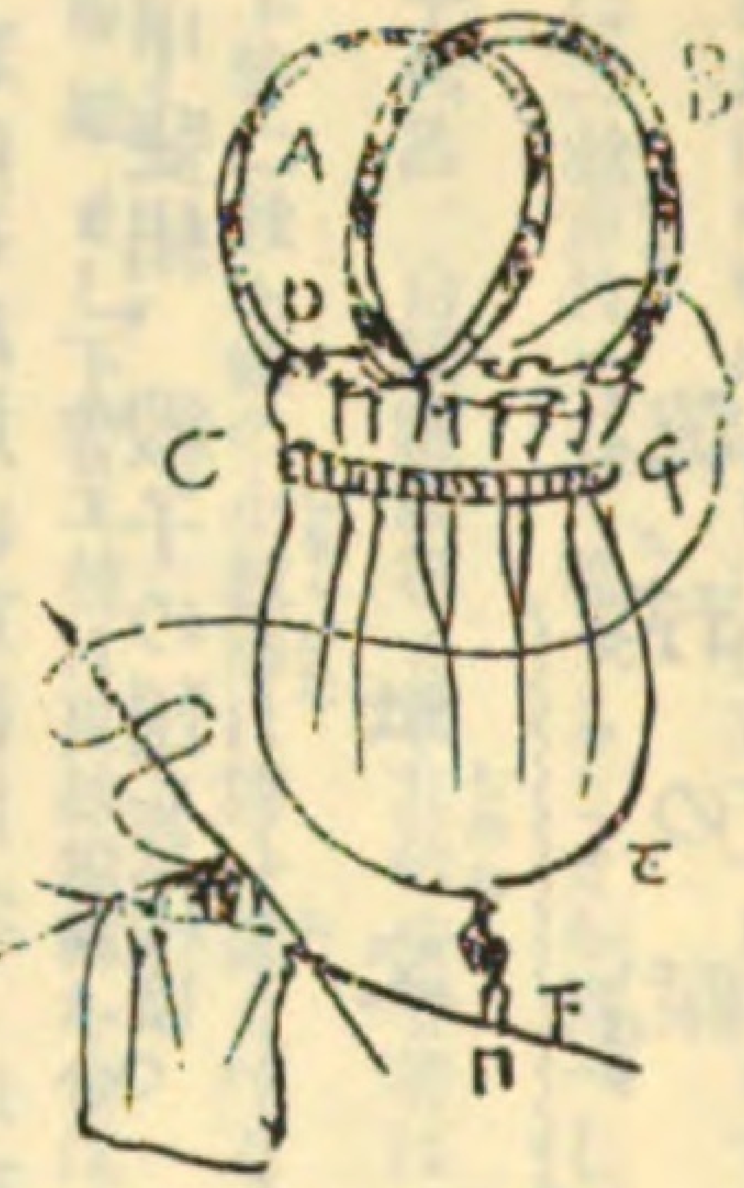
第三圖は「旅行袋」（ツラヴエリング、バッグ）とも譯すべきか、圖に示すが如く長六「インチ」幅四「インチ」の小形の袋なり、これは重に西洋婦人等が旅行等の節、大切なる物品を收めて携帶の便にするものなれば、極めて美麗にして而も三嚢共に各々色を異にするを可とす。

各袋とも紐を通す爲に兩側に各二個の穴を穿ち（則ちAなる所）其襞穴に長き紐を通して引きしむれば右側にある如き袋物となる。


第三圖

第四圖は「ニッチング、バッグ」（編物袋）と稱し、（AB）

(C)(Cは袋の中にかくれて外にあらはれず)は薄き木の輪なり、(A)及び(B)は容易に腕の容れらるべきほどの大きさと爲し、




第四圖

(C)及び(G)なる點に於て各々相對して固く一方をつけ、輪の外面は種々の色せる「リボン」を以てだんだらに巻きて修飾と爲す、(F)は房なり、さて其用は輪によりて袋量を擴げ、中に絲物を容るゝに便にす。

## 婦人綿入仕立

婦人用綿入の仕立法を示さん。

通常の婦人の衣服の丈則ち三尺八寸としての仕立法を案內せば先づ兩袖一尺六寸宛都合三尺二寸を裁ち去りて袖丈一尺五寸と見積り、前後身ごろ三尺八寸宛四つ則ち一丈五尺二寸を總身ごろと爲し、おくみを六尺五寸を取り、其中より三寸五分巾長四尺八寸の襟を見積るべし、斯くすれば一端の反物にて製し得らる、裏地は普通は秩父を用ゐれども、價格の廉なるは甚だ使用に損失多し、一圓內外の花色「キヤラコ」最も宜しく四十錢より五六十錢に至る羽二重金巾を用ゆるも宜し、流行の裾裏は上等にて珍色の縮緬を用ゆるもの多し。」布帛地は其人々の嗜好に任せて可なるも流行の衣服は糸織、山絲、銘線、節糸、秩父縞、珍八丈等なり。

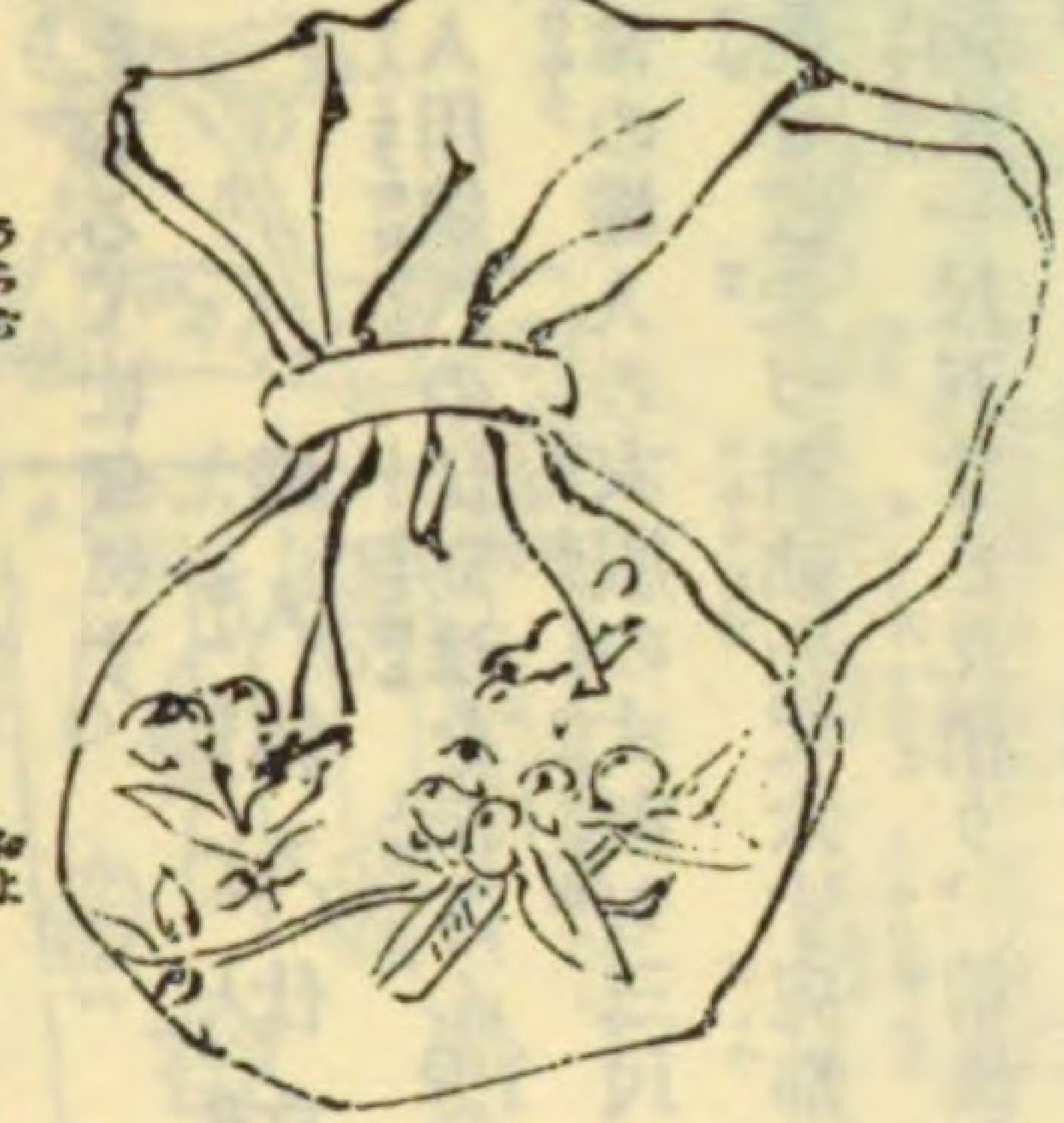
袖口は通常繻子を用ゐて可なり、一尺三寸を要す。

綿は木綿物にて「青梅」一袋、絲物にて眞綿六七十錢を用ゐなば宜しかるべし。

## 美麗なる錢袋

圖に示すは巾幗社會の間に流行する銀貨入にして其の形は小判形なり。一側には水注の柄の如きをつけ、其の口を開閉する金屬の輪の遯し去らざるやうにす、意氣なる流行にあらざれども、令嬢向には妙なり。

之を製せんには適宜の大きさ（通常は竪二寸を限り横



は之に適ふ）に兩側二枚を小判形に裁ち裏も同樣二枚を見積り、さて縫ひ合はすれば容易に此の袋物を製し得らる、柄は少さく見事に閉ぢて裏地を用ゆるに及ばず、環は金物屋に就きて購求するも亦所持の指環を利用するも可なり。

表の布帛地は重に博多、琥珀、繻珍の類を撰び裏地は甲斐絹、緞子の類を用ゆ。

## 社交一斑

### 流行の栞

春夢

再び春衣に就き

流行の事は本雜誌が常に率先して讀者に報ずるを怠らず、本年の冬衣及春衣等の事は第四十號より前號（第四十三號）迄怠らず案内し置きたるが、果して吾人が報ずる如く近日に至り某呉服屋より「新年用和服の流行一斑」と題し我社に報し來り、又府下の新聞も之を掲載せり、北要領は吾人が曩に報したると等しけれども又聊か趣を致せるものなきにあらざれば其儘掲載して讀者の一顧を煩はさんと欲す。

衣服

男子用　上着を市樂にして下着二枚を同地質の風通織か或は小紋御召を以て仕立てたるもの高等の衣服として流行の第一位を占む此れに前記の黒七子の紋付羽織を着し仙台平の袴を着用せば新年回禮の服裝として先づ最上のものとす次は繋ぎ糸織、諸糸織、平地糸織、節糸織等にして裏はいふ迄もなく花色絹なれど近頃又淡花色絹を用ゆるもの多し而して光澤のなき地質に至ては結城紬、銘仙、秩父縞、八丈紬の如きものにして裏地は額裏仕立（即ち胴を花色絹とし裙は羽二重金巾）を用ゆるものとす

婦人用　第一禮式着には黒縮緬の吹擴樣し、上着に白羽二重の下着を重ねたるを以て高等作りの一とす又色を利休鼠、千歳、藍鼠、濃肉色、貴族鼠とし稍々華美なるは紅掛鼠、藤鼠、裏葉柳の内にて好み、模樣を

古代松竹梅、結ぶ柳、都鳥、福寿草、遠山霞に鶴、光琳の桐の内を撰み三枚揃に染めて着す（去れど下着二枚を他の色に染むるも亦面白し勿論此は中着を通しに仕立つべし斯くするときは上着一枚を脱きたる時更に二枚重ねとして着することを得べし）又禮式用の半襟は白綸子白壁千代呂、白紋縮緬等とす其他の春着は小紋縮緬の三枚重ねなるが是れ亦下着二枚を他の小紋形に揃一置くべし次は縞物にして上着を縞御召又は市樂とし下着二枚は更紗縮緬を合はす此は相變らず流行なるが若し贅澤に好まば上着を小紋御召とし下着二枚を同地質の變り物か又は紋縮緬を隨意の色に染めて合はすべし而して其裾裏は變り色の縮緬に限る樣なり其他は糸織、山糸、銘仙、節糸秩父縞、變り八丈等の類なり

帯

男子用　繻珍織及び博多地の紋織を以て第一の流行とし之に次くは矢張り博多地の黒無地、鐵無地、鼠無地、銀鼠無地等の如きは隨分需用者の意を迎へ得らるゝものゝ如く又鐵無地或は紺無地の片側口源色の微塵類は多く商人向に流行する傾向なり

婦人用　中す迄もなく繻珍織にして地色は肉色、櫻鼠、貴族鼠、利休茶或は黒御納戸の類とし模樣は紅葉菊を以て七八分を占め其他は目出度き摸樣を織り出せしもの流行し稍々地味なるものに至ては同じく繻珍織の黒、皮色、鐵色の共摸樣とし桐生產の小柳繻子之に次ぎ彼の唐繻子に至ては日清事件以來稍々廢りし傾向あり蓋し以上は丸帯なるが腹合せに至ては片側を前記の小柳繻子、唐繻子、繻姫繻子の内にて撰み片側を繻珍織繻多織或は變り八端織を合せて用ゆる人多し

当業者の談話（流行洋服につき）

新年用洋服の新流行として其當業家の語る處に據るにフロックコートは相變らず黒綾、平無地の三組にて一本綾は下を上等の縞ラシヤにて三組何れも上等二十五圓より下等十二圓止りなり、コートは長コートにて茶無地流行し上等二十圓綾は十八圓より十三圓迄とす半コートも同じく茶無地にて上等十六圓より九圓迄とすモーニングは一本綾黒紺のものにて二十圓より十三圓はす綾は縞ヅボンをあしらひ價格同上背廣は十八圓より九圓までにて柄行替りなし總べてヅボンは稍太き細き方流行し上着の丈けは稍々短かき方多しとまた帯付長外套は玉ラシヤにて襟と前に毛皮付のもの多く價は四十五圓より十五圓まで次第あり色は紺鼠茶あり柄は大玉小玉等あり二重マントには上等綾廿五圓縞もの十九圓より十圓まで裏は總甲斐絹なり總て昨年より一割半方騰貴せり、これ銀貨の下落

と朝鮮事件以來職工の拂底なるに由ると云ふ

### 友しらが(福鬢形櫛)



前號の紙上にやまと形福鬢形を紹介したり、彼は日清事件を形りたるものなれども、今度尾張町松田白牡丹本舗にて新年用をあて込み製造販賣したるは圖に示すか如き福鬢形にして、臺は木橋に臙色のはし(塗を施し、正月の供物なる伊勢蝦と橙を面白く顯はせり(松花作)之を名づけて友しらがといふ、豈に目出たき名ならずや、一枚箱入四十錢餘なれば進物用として諸方へ捌け行くと聞く

### 指環

近來指環の流行は種々あれども、其大略を言へば金色のあまりピカピカと燦爛なる大形のものは行はれず、目下の流行形ともいふべきは飾玉に重きを置きて臺は細形を尊ぶ、玉は「ダイヤモンド」を第一とすれども高價にして常人の購求すべきものにあらず、普通川ゐらるべきものは眞珠「トツパース」の類を以て最とす、臺は純金第一にしいぶし銀なども面白し。

### 帶留

紐は相變らず縮珍を第一とし打紐も追々行はる、金具は指環と等しく大形の金色ピカピカしたる者を忌み、艶消しの純金の深彫か銀臺の總彫を好む、寶石入りも兆々行はる。

### 新年及クリスマスの贈物

本年、京橋區出雲町警醒社に舶來したる「クリスマス」用贈物の新形は切拔したる細工物多く、中に頗る面白きもの澤山あり、價は七八錢より三十錢内外、可憐なるものあり、可笑なるものあり、可尊なるものあり、一々其形容を盡くす能はず、同社にて一昨年來より賣り出せし「吾家の歷史」は殊の外の好評にて、本年最上紙製五十錢のものを發賣したるが直ちに賣切になれりと一部三十錢假裝二十五錢新年及「クリスマス」の進物として妙なり。

贈物には有益なるものを贈答すべし、其巨細は茲に記せされども、譬へは攪眠時計の如き「ナイフ」の如き、若しくは實用袋物の如き若しくは自製の品物若しくは有益書籍の如きもの最可なり。

## 歳晩流行の品物及價格

◎足袋類　足袋はキヤラコの紋羽類の騰貴したる爲めキヤラコ表及紋羽裏のものは五厘方の上直なり男物紺表白石裏にて十一文二十一錢以上半文につき五厘違ひ雲齋裏は三錢安女ものは白キヤラコ九文半にて十錢以下半文五厘違ひ紺キヤラコ十文にて十七錢以下五厘安紺かすり表のものは紺無地表より二三錢安にて總て紋羽の裏付は三錢上り右は店によりて多少の違ひあれども大躰の直段は斯の如し

◎帽子の流行　官吏會社員及紳士社會には相變らず黑の山高形縁廣のもの行はれ價は八十錢以上二圓五十錢前後なり風變りのものにて紺の中山形或は猪口形又は中折形あり中山形にて二圓五十錢前後猪口中折形等は少しく下りて一圓五六十錢より二圓までなり商人向にはニユープハツシヨンの猪口形といふもの多し價八十錢より一圓以上一圓四五十錢までにて模樣は霜降、澁茶、黑等あり外山低ツバ狹形は從來の通り用ゐらるゝ禮帽即ちシルクハツトは和製二圓五十錢より三圓上等舶來品にて三圓以上六圓まで種々あり

◎下駄類の流行　本年は桐の價格四割方騰貴したる爲め下駄類は凡そ一割五分方の騰貴なり昨今の流行にて男物は堂島形上クリ横柾にて南部表鹿の鼠革或は絹織物の緒にて上等飛切一足三圓より四圓以上緒には一樂織鴉革羅紗及び摸様革等もあり價格は同斷なり上中等は同様にて價は五六十錢より二三圓迄並ものは南部まがひ白表にて馬の鼠革等の緒を添へ一足二十錢より四五十錢前後婦人向は堂島跡丸形最も行はれ臺は柾の白木にて表は本南部に緒は黑澁茶類の本天或は朱珍其他の絹織物にて價格男物と同斷中等以下は絹物及唐天類の緒にて價格また男物と大差なし雪駄類の流行形は下駄と變りなく價は男物上等一圓五六十錢より二圓女物は一圓五六十錢より二圓五十錢内外其外草履傘類は從來と變りなし

◎西洋小間物商況　西洋小間物三割方の騰貴なり防寒用肌着毛メリヤスのシヤツはヅボン下共一組四圓以上五圓前後タチル品拂底の爲め和製にてダース一圓より三圓の間ゴムカラ一ダース一圓三十錢カフスは三圓前後金巾製はカラにて四十錢以上六七十錢、カフス七十錢以上一圓六十錢まで、ネキタイ黑白の結び下げ形にて和製品二圓以上三圓五十錢まで、同じく蝶形二圓内外なり、手袋時節柄厚地ものにてセーム革裏毛のもの九十錢以上一圓三四十錢、舶來スコツチ製三圓以上五圓まで和製一圓五十錢より二圓五十錢位、靴下スコツチ製二圓以上なり外にゴム鞠は新年玩具用として賣行最も多く十五年來の高價を現はし價ダース一圓二十錢以上

## 日用品物價（十二月廿一日）

◎白米（一圓に付）　一等白米七升五合●二等白米八升〇〇●三等白米八升四合●四等白米八升九合●五等白米九升三合

◎雜穀　本貫大麥三斗四升五合●脇場大麥二斗四升五合●肥後上小麥一斗九升●同麥安一斗七升五合●船橋小麥一斗九升●常州小麥二斗〇●下總小麥一斗九升七合●札入竹林麥一斗二升五合並一斗三升五合●上割麥一斗三升並一斗四升〇●佐野搗粟一斗二升五合

◎鹽　赤穗三俵七分五厘●大鹽并に八家三俵八分●木齋五俵四分●新齋五俵九分

◎種油　胡麻十一圓四十錢●地水九圓廿錢●荏油十三圓六十錢●桐油八圓二十錢●坂水十圓也●星印十圓也●入山十圓也●いせ箱十圓也●一川九圓九十八錢●イ印九圓八十八錢●久ト九圓九十五錢●非桁九圓九十七錢●チヤタ一圓七十九錢●タンスグ一圓七十七錢八錢●ホーキ一圓七十

九錢八十錢

◎糖　赤糖上銘六分三厘●金上上銘六分七厘●攝州白糖九分五厘●金上八軒物九分五厘

◎歳暮川の品々　大鴨番ひ背籠入壹圓三十錢より壹圓五十錢、同大鴨壹羽入七十五錢より八十五錢、同籠なし生の雄壹羽に付六十錢、同雌五十五錢、中同雄五十錢、同雌四十錢、小鴨雄同二十錢、同雌十七錢、相鴨壹羽に付八十錢より五十錢迄、雁（ヒシクヒ大雁）壹羽に付二圓五十錢、普通鴈壹圓五十錢、鮭は普通四別上物壹圓に付三本二三分同志別三本四五分が河岸の仕切相場なり本年は北海道地方大不漁にして加ふるに軍用上戰地へ多分輸出せし爲少なくして非常の好況なれば價格平常に比して三四割の上騰なりと又目下府下在荷は三千石程なりと。鱈は壹圓に付十一本より十二本此も大相場にて昨年より高價なり。鰤は捕捉産出もの十七本より十八本、樺太産出二十三本より二十五六本、此も仕切の大相場にて目下府下の在荷二萬石程あるも鮭と同樣戰地行きの爲め價格夏季以來三割高なり。凶作は壹圓に付一貫八百目より二貫目此は戰地へ向かざるも價格昨年より高し。數の子は壹圓に付二貫七八百目此は戰地に向かざる故か昨年より廉なり

◎鰹節の景況　鰹節は産地の薄漁なると夏以來軍用の爲めに賣行多かりし爲め發詐品必迫にて七割方騰貴したり相場は伊豆大中節の上にて十貫目三十圓小節は二十八圓薩州大節の潤ものにて二十五六圓同背ものは二十二三圓小節は二十二圓前後土佐は伊豆節と同格房總節は中節にて十九圓より二十一圓小節は十七圓前後より二十圓同龜節は十五六圓より十八圓まで仙台の土佐製は十五圓五十錢より十六圓五十錢下物にて十二圓五十錢位同龜ぶしは十二圓より十三四圓まで岩城の土佐切は十六圓前後より十七圓内外同龜ぶしは十四圓内外仙台南部産の膈來龜は上物十一圓より次は九圓なり總じて軍用の爲め下物の賣行多かりしを以て此の如き品必迫となりしものにて斯ることは近年稀なることなりと當業者は互に語り居れり

◎密柑類の景況　歳暮用年玉用にて密柑は此頃大に景氣付たり且つ本年は原産地の豐作なりし爲め昨年に比して五割方の安直にて普通並物は壹圓に付五箱より三箱、溫州の極物は一樽一圓三十錢前後なり又柚は籠入百七八十詰にて一籠三十五錢乃至四十錢前後金柑は一箱四十五錢より六十錢橙は百個入七十錢百五十個入六十錢より五十五錢二百個入にて四十錢前後の相場なり

◎青物野菜の走り　目下青物は一躰に不引立にして矢張り日清戰爭以來各料理店の不印に連れて各地溫泉場へも出廻りなき折柄なれば捌方惡しき方なり今神田多町の京場に就て目下青物の走り物を聞くに豌豆は本月に入りて四五日前より市場に現はる此は房州原岡近邊の産出にして一升の價六七十錢なるが誠に出荷の僅少なり、地獨活は本月未だ來春初賣を出すべきが近來靜岡、遠州、下總等より絶へず出荷さなる頗ろ大にして十本に付價十錢位、筍子も本場目黑産出も追々大きくなり目下は孟宗にて價は一貫目五六十錢なり、蓼芽は本月上旬より市場に出づ一升の價二十五錢此は重につまみ物に要す、生椎茸は上總産にして先月來出廻りあり一升に付價三十錢位、胡瓜は走り長二寸前後の品壹本に付四五錢なり此は新宿御料地植物御苑御拂下品なり、木の芽は名古屋地方より即今産出せりと云ふ

◎鳥類の價格　歳暮年始用の鳥類は昨年より凡十錢高にてひし番入一籠詰四圓五十錢より五圓まで同一羽入二圓五十錢より三圓雁番入三圓より三圓五十錢迄同一羽入一圓五十錢より一圓八十錢鴨番入一圓三十錢より三圓五十錢迄同一羽入七十五錢より八十五錢位なり

# 雜録

## 最近社會思想一斑

### ◉社會進歩の兩方面（六合雜誌第百六十八號）

内部改良と外部改良あり、一方より見れば人は境遇の

奴隷と謂ふべし、然れども、又一方より考ふれば、人は外境を改造し其面目を一新せしむるを得べし、古今文化變遷の歷史は、畢竟人間が外境を變化したるの結果ならずんばあらず、

◉日本國民の同化力（東亞說林第一號、藤田豐八氏）

余が見を以てせば日本國民は最も能く蒙古人の長所と短所とを享有せるものなり、彼等は情に富む、故に激し易く、怒りやすく、亦た笑ひ易し、浮動輕爲の非難免るゝに所なけむ、情に富むの弊や淺、故に深邃なる哲理なく、絕大なる理想なし、近思卑想の非難亦た免るゝを得じ、然ども彼等はこの短處あると同時に、情に富むもの丶自ら享くべき、長所を有す、情は實行す、行に敢に、義に勇む、情は進步す、日に新に又た日に新なり、日本國民は深慮せず、然とも彼等は敢行す、日本國民は玄を釣り幽を闡くの冷心を有せず、然れども彼等は千難も屈せず萬患も挫せざるの勇氣を有す、自己の文明を採り來りたる幾多先進を歷して、每に之に駕上するもの、職としてこれにこれ由る、

◉基督敎的生活の起端（宇宙神敎第四卷第四號）

基督敎會に加入するは必ずしも品性熟達の後たるを要せず、唯だ品性の完成を希ふの切望堅固なれば足れり、されば人若し正善と純潔とに與みし罪業非道に敵するの決心即ち進んで基督の如くなるてふ決心確ければ彼は基督敎會に加入するを得ん、是れ基督敎徒たるの第一着步にして根本的の必要なり（他の基督敎徒が經驗せる安慰の如きは此の根本的の必要を具たる後に來るべし）、然れども以上の決心あるも直ちに完くキリストの如くなること難し、此の決心を以て敎會に加入するは唯だ基督敎的生活を修養せんために下種したるに過きず、故に其の良好なる結果は之を後日に期して可なり、精神的發達は猶ほ物質的發達の如く漸次にして初め下種したる時直ちに收獲するを得ず、先づ芽出

て、次に穗生じ而して後に實のる、幾多の經驗を累積することなくして基督教的生活の全き結果を得んとするは難ひ哉

◉戰爭と婦女（婦女雜誌第四卷第廿三號）

凡そ一國の強弱盛衰は、其國の農工商の盛衰、政治の得失によりて决する處ありと雖も、要するに軍隊の強弱如何が、最後の判决者たらざるを得ず、連戰連捷の今日、歐米の各新聞雜誌が、如何に我國を觀察したるかを見ば、思ひ半に過ぎん、而して軍隊をして強盛ならしめんとせば、一國の人心尙武に傾かざるべからず、就中婦女子が尙武に傾くこと尤も必要なり、何となれば婦女子が男子に於ける冥々の勢力は、頗る強大なるものにして、婦女子の好尙如何は、男子に影響を與ふること少なからざるを以てなり、婦女子が軍人を愛する社會に、好軍人の輩出すること疑ひを須ゐず、好軍人の輩出したる國家が強大なるべき、是れまた論なし、これが適例は獨乙に在り、吾人は今回の壯擧が、婦女子の氣象を一變して、國家強盛の基を開きしを喜ぶ、

◉教會の感化（護教第百八十號）

教會は須らく温たかなる情を以て四來の人を醞和すべし、今日の教會は講壇ありて教會なし、

◉沙門親鸞に愧ぢよ（同上）

親鸞は一個の沙門のみ。樹下石上固より淸素を甘ぜしもの也。何者の本願寺門主ぞ敢て乃祖の遺範を忘れて、尊大自ら居らんとするや。彼れが玄武門の勇兵原田重吉氏に與へたる所の者を見よ。何ぞ其官府的文字を用ふることの甚しきや。

第三師團第十八聯隊第六中隊　原田重吉

其許儀征清從軍中平壤役に於て單身勇を奮ひ先登して玄武門を開き拔群の戰功を奏し候は全く我帝國臣民たるの本分を盡せし者にして實に萬世不朽の名譽なるのみならず又平素本宗二諦相依の教旨を服膺するの致す所と深く御感賞の事に候依之以特別御染筆五百代讃文附六字尊號幷に菊趣念珠一連被成授與候事

明治廿七年十二月四日　大谷派本願寺執事渥美契縁

## ◉史學隆盛の眞意（基督教青年第二卷第一號、晃南逸民）

中に言へるあり、

懷古の情は人をして殆ど狂せしむ、深夜沈々梢風夢を破る時、獨り潛める情線を推して、過去の記憶に觸れしむるときは、無量の神波縷々として胸底に動き、我をして昂然奮起せしむるを覺ふ、然り懷古の情は實に一種のインスピレーションにして、我に犯すべからざる自信の念を與へ、以て將來の活路を開く、若し人に記憶てふものなく過去を回想して自らを鞭つことなしとすれば、世に人類ほど憐なるものなかるべく、從て人類社會に進步なるものあらざるべし、獨り記憶は懷古の情を起し、懷古の情は吾人を驅て希望の境に進ましむ、夫れ然り一國民の勵發も必ずや其昔を追想し、懷舊の念に刺激せらるものならずんばあらざるなり、要するに國民の自覺は歷史より來り、自覺は進步の鼓動力たるなり、

と、新奇の言にあらずと雖も、史學の効用を說き得て味あり、

## ◉近世歐洲思想の三大變（基督教青年會館に於ける大西祝氏の演說）

歷史に外部の歷史あり、思想の歷史あり、現時の思想界は種々に變動し居りぬ、その變動の素因を究めんとするには、過去の思想歷史を研究すべし、歐洲近世思想の三大變動とは何ぞ、第一は天文學の大變動なり、千古の大思想家コペルニカス氏出で丶地球中心說を排し地動說を唱へてより、地球は四角四方にして動かぬものと云ふ舊思想を破れり、第二は生物學の大變動なり、人間は如何なるものぞ、舊思想は平然として萬物の靈長なりと驕れり、學問界の大王ダーウィン出で丶進化論を唱へてより人間も一の動物なると判然せり、第三は宗教感念の大變動なり、オーゴスチンの如きは總ての宗教中に於てクリスト教のみ能く罪人を救ひ得

て他の宗教は然らずと曰ひたりき、是れ一般宗教論者がクリスト教に對する觀念を代表せしものにて、今日までの宗教論者は皆かゝる觀念を抱き居りしなり、然るに今日新派宗教論者は、之と全く相反するの説を唱ふるを見る、結局何時果てん樣も見へざれども、兎に角解脱の時代に在り、

世界思想界の大勢此の如し、顧みて日本の思想界の如何なる程度にあるやを見るに、未だ世界思想界に踴躍するの文明來らざれども、東方は白めり、失望すべきにあらず、

## 山嶺探撿の發達（三）

十六世紀に入りて、新なる風潮、歐洲の學者社會の上に擴り、文學者は其變りたる意向を以て山嶺を觀るに到りぬ。若し宗教上の紛諍と、之に原因したる戰爭とをして、智識上の進歩に打勝たしめざりしならば、十七世紀は、恐らく充分なる探撿を覩、又アルフス山の探撿をも、成就したるなるべし。レヲナード、ダ、ヴインシーは山嶺探撿に就ては恐らく、新なる意向を顯示したる最初の人なり。彼はモンテ、ローサの南面を登りて、雪界線に達したるもの丶如し。彼はドラゴン若くは惡魔に就て毫も語る所あらざれども、雪の狀態と、其霰に似たる固有の粒成躰なるとに關して精確なる觀察を爲せり。

ツーリツヒの哲學者、就中コンラツド、ゲスナル及びジョシアス、シミレルの如き、十六世紀の中葉に於て、最も大なる注意を山嶺に與へたり。ゲスナルは心中より眞の探撿者なりき。シミレルはアルフス山に關する尤も興味ある一書を出版したりき。此書は今日も尚ほ一讀の價値あり。斯書中に於て、彼は雪界線以上に登り行かんとせば、繩の要用あると、及び其他の必要な

る準備を爲すべきとに就て實際的忠告を與へたり。去れば、吾人の登山術はツーリッツヒ派の登山者と共に始められたりと云ふも不可なかるべし。

然れども、次の十七世紀は全く一の進歩だに看るとなくして過ぎけり。斯世紀に於ては、前已に云へるが如く、歐洲の人民は戰爭、紛議に忙はしく、又他を顧みるの遑あらざりき。普通の旅行者、及所謂大遊歷家と稱せらるゝ者は、大概山嶺を以て厭ふべき瘤と爲し、而して渾ての『自然の美』は平地に保藏せらるゝものと思念したり。斯思想の徵跡はウオーター、スコットの時代に到るも(例せば『ガイエルスタインのアン』と題する篇中に於て)尙ほ發見するとを得べし。斯る觀察に對する反動は、一は科學者に依りて喚起せられぬ。氷河は彼等の思考の面白き題目と爲り、次には實地研究の題目と爲れり。而してルーソーを頭として戴きたる小說記者の如きも亦山嶺を嘆美するを以て、是迄一般に認識せられたる定則に反對する、彼等の革命的意向の一部と爲すに到りき。

若し吾人が斯新時代の發端を定めんと欲せば、恐らく千七百三十九年こそ最も適當ならめ。何んとなれば斯年は、吾人が登りたる最初の雪山チットリスリル探撿を試みたる年なればなり。次いで千七百四十一年、ポツコク及びウインドハムの二人はシャムーニの谷を訪へり。彼等がジエヲパより遙に斯谷に赴きしは、モン、グロン山に接近して、其形象を覩んとの純粹なる好奇心に驅られたるものにして、彼等は斯時モンランヴエルに登りてグラス湖を俯瞰したりき。モン、グロンの絶嶺に達せんとするの企圖は、千七百七十五年案內者を呼稱せられたる一の組合に依りて試みられぬ。是れ吾人が記錄の上に看る所の最も古き企圖にして、彼等は大高原までは登りたるもの丶如し。斯の同し企圖は其後屢々繰返されしが、千七百八十六年に迨ひしジヤ

クス、パルメツト及びミクル、バツカードの二人ありて遂に其目的を成就し、始めて斯山の最高處に達するとを得たり。

## 香爐峯の雪

（口絵の絵解き）

天漸く寒く、雪の時代は來れり。彼女が其白妙の袖振りはえて地上に落るや、世は忽ちに銀世界となり、冬枯の樹も花ならぬは莫からんとす。

此の美はしき來客に逢はゝ、人は他出に適せずして、我人ともに門を鎖し、火桶を擁して、彼女をあしらふべし。而して斯く彼女をあしらふが爲には何人もよく懐ひ出るは、香爐峯の雪の故事ならずんばあらじ。

王朝の昔、時の帝が朝の雪をみそなはして、香爐峯の雪を宣まはせけるに、御前に侍ひし人々の中、清少納言進み出で、御簾を褰げけりとは、人の語り傳へたる所。

唐の詩人白樂天の句に、香爐峯雪褰レ簾看といへるがありしを、帝記臆させ玉ひて斯く宣はせけるに、彼女は直ちに簾を褰げての意を了して事こゝに及べり。其の學びの道も暗からずして如何に慧敏なるものなりしかは、此の一事のみにて推し量るに餘りあるべし。蓋し此頃は白が長慶集いたく我が學者紳士間に持てはやされしなり。

唯彼女は餘りに交際場裡の婦人なりき。善くいへば才鋭く學豊に、綺羅翩翻として春の野の胡蝶の如くに世を翔り、常に交際場裡の女王として善く談話一場の中心たるべきものなりしと雖、之を惡しくいはゞ少しくお轉婆なりき。才を衒ひ、識に誇り、浮氣にしてやゝ出過ぎたる如き傾きなからず。

故に彼女は他の倣ふに好からざる少なからぬ缺點あ

るものなれども、其女流文學者としての位地に至つては、之を同時の紫式部と幷べて今古其例少なき才女なりき。

式部が豐艶にして櫻の花の如くに爛熳たるに比し、彼女は清香を誇りがに春に先つ梅花の如く、氣高き中に花の花たるところあり。

彼女が世に美くしきものを擧げて、

瓜に書きたるちごの顔。雀の子のねずみなきするに躍り來る。又紅粉などつけて居ゑたれば、親雀の蟲など持て來てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちいさき塵などありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる小指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の目に、髮のおほひたるを掻きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮のうき葉のいとちいさきを、池よりとりあげて見る。葵のちいさきもいとうつくし。何も〳〵ちいさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲幼げにて文よみたるいとうつくし。鷄の雛の足だかに、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵とかしかましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。雁の子。舍利の壺。瞿麥の花。

といへりしを見ても、其氣質意向好向も自ら知るゝ也。

## 時事一斑

### 恤兵の時來れり

恤兵の時は來れり。寒威滿州の天を壓して落ち、運輸を妨げ、厚からぬ衣を透して膚に迫り、刻々鳳凰廳瀋城の野に轉戰しつゝある我兵を襲ふて、支那兵よりも猛烈なり。

聞く戰地の物價實に下の如しと。

酒一升　一圓二十錢。　一合　十五錢。
味噌一樽　二十圓。　一碗　二十錢。
砂糖一斤　一圓八十錢。　醬油一合　十錢。
鍋一枚　八錢。　塵紙一帖　五錢。
書簡袋百枚　八十錢。　一枚　一錢。
煙草百目　一圓四十錢。　卷紙一本　三十錢。
鹽鰯十尾　二十錢。　鹽鯖一尾　四十五錢。
粟おこし一つ　九錢。　麵包菓子一個　三錢。
素麵一箱　十二圓。　鰹節一本　五十錢。

防寒具は

襯衣一枚　一圓二十錢。　股引　一圓五十錢。
足袋　三十錢。　外套古物　五圓。
毛布　二圓五十錢。　帽子　二圓。
鳥打帽　五十錢。　手袋(メリヤス)三十錢。
靴下(メリヤス)　卅錢。　襯衣下穿　一圓五十錢。

見るべし、如何に大に不便が我兵を襲ふか、又如何に大に寒さが我軍を攻むるかを。

又

陸軍省より送りたる防寒衣の戰地に着するや、直ちに之を配與するに方り、桂第三師團長は訓示して云へり。

今般支給されたる防寒用の外套は酷寒に至り始めて是を使用するは勿論假令酷寒の候と雖も哨兵勤務等に該當し萬止を得ざるに非ざれば成べく是を着せしむるを避くるを要す是れ皮膚をして寒氣に馴れしめ躰軀をして夜間頓に寒冷を覺へ防寒の困難を來さゝらしめんが爲め異邦冱寒の地殊に嚴寒に際し厚く此邊に意を用ゆるに非らずんば數多の病兵を生じ戰鬪力を欠き不測の患害を釀成するに至らんも計り難し

故に其使用法は晝間寒氣に堪へざるを以て度とし夜間は特に温暖を取る等周密なる注意を以て目前來るべき此の嚴寒を凌ぐは今日に於て尤も急務とす各部各隊長は特に防寒用被服着脱の時機を適宜規し以て衛生上の大敵たる酷寒を豫防するを望む

明治二十七年十一月二十二日

第三師團長　桂　太郎

天下飽食暖衣の人、須らく我が遠征に走りたる弟兄が如何に苦しき寒氣に馴るゝの練習をなしつゝあるかを想ふべし。

## 野戰郵便爲替

野戰郵便爲替愈實施せらる。下士以下は請くる所の俸薄くして家鄕に送金するに至らず、將校は家族姻戚尙に陸軍省より請取るを以て、未だ大に其便を藉るに至らざるべしと雖、人夫等が賭博其他の惡風に染みて無益なる消費をなすを防ぎ、從て其家族を霑すの利便少なからざらん。

## 思想界の傾向

基督教信者中、一派の帝王神權說を唱へ出でたるものあり。

思想界の傾向、見るべきにあらずや。

## 大日本海外教育會

本多岩本諸氏の設けたる大日本海外教育會は、其憲法及び會則を斯く定めたりとなり。

### 憲　法

第一條　本會は海外に教育を施すヿを目的とす
第二條　本會に役員五名評議員十名を置く
第三條　會員は評議員を選擧し評議員は役員を選擧す
但し評議員は役員を兼ぬるヿを得
第四條　評議員は本會の事務大綱の議定に與かるものとし其任期は二年とす
但し評議員は自から補欠選擧を爲すヿを得
第五條　役員は本會の事務を執行す
第六條　役員は會長、副會長、幹事一名及會計二名より成り任期は四年とす
第七條　會長は事務を總理す
第八條　副會長は會長事故ある時之に代る
第九條　幹事は會長を補佐して事務を處理す

第十條　會計は本會の經濟を修理す

第十一條　本會の憲法は會員四分の三以上の同意を經ざれば改正することを得ず

附則

本會は最初朝鮮國の教育に從事す

## 會則

第一條　會員たらんとする者は會員の紹介より會長の承認を經べし

第二條　會員は一年三圓以上出金の義務あるべし

但し本會より特に推擧したる者は此限にあらず

第三條　本會の目的を賛助し應分の盡力を為すものを會友とす

第四條　每年一回會員の總會を開き一年間の事務會計を報告すべし

但し會長は臨時會を招集することを得

第五條　會則は會員多數の同意によりて改正することを得

## 一種の國民學校

石川縣江沼郡分校村にて明治廿年に設立したる一種の夜學校は、教場唯黒板幻燈器械のみにて、恰も寄席の如くし、雨の夜は雨を說き、風の宵は風を說き、或は忠臣義士の歷史談、或は農耕稼穡の事等何くれとなく實用と趣味とを兼ねたるものを講義したるに、其効果寧ろ規則正しき學校に優り、今は全郡到る所に此の種の學校を見るに至りたりと。亦國民教育の一手段と謂ふべし。

## 東京に於ける旅人

東京へは如何に多く旅人來るか。(木賃宿下宿屋等を除く)

| 明治廿六年度 | 宿泊人員 總人員 | 宿泊人員 平均一戸ニ付 | 宿泊料 總金員 | 宿泊料 平均一戸ニ付 |
|---|---|---|---|---|
| | | | 円 | 円 |
| 一月 | 六、二九八〇 | 三一四・九 | 一、七九八四 | 八九・九 |
| 二月 | 五、六四八八 | 二八二・四 | 一、六四三三 | 八二・二 |
| 三月 | 七、三六六三 | 三六八・三 | 二、一一六九 | 一〇五・八 |
| 四月 | 一〇、三八六四 | 五一九・三 | 三、〇一〇四 | 一五〇・五 |
| 五月 | 七、八五二一 | 三九二・六 | 二、二六八七 | 一一三・四 |
| 六月 | 六、三〇六五 | 三一五・三 | 一、八三五五 | 九一・八 |
| 七月 | 六、〇三七〇 | 三〇一・九 | 一、七二一三 | 八六・一 |
| 八月 | 五、九一四八 | 二九五・七 | 一、六七六二 | 八三・八 |
| 九月 | 八、五九九三 | 四三〇・〇 | 二、一六一七 | 一〇八・一 |
| 十月 | 八、五三八六 | 四二六・九 | 二、四五六七 | 一二二・八 |
| 十一月 | 八、一二九五 | 四〇六・五 | 二、三一二一 | 一一五・六 |
| 十二月 | 七、四〇六三 | 三七〇・三 | 二、一一七〇 | 一〇五・九 |
| 總計 | 八八、四八三六 | — | 二五、一一八二 | — |

## 東京の人力車

東京府下に於ける人力車、明治廿五年末に於て車躰四萬八百廿三輛、車輓四萬五千五百五人あり。之を府下の同年に於ける人口百廿九萬九千三百廿六人に比較すれば、人口百に付車三輛一四、車輓三人五の割合なり。

## 明治廿七年と名士の死

明治廿七年は、知名の士多く人類の舞臺を辭したる年なりき。

日清戰始まりて少壯有爲の士官が劍に由て死の國へ誘ひ去られたるは勿論、自然の力の爲に死の手に掴まれしもの極めて多し。

試に其一二を數ふれば、國家宿老として柳原前光伯沒し、中井弘氏沒し、山口尙芳氏沒し、學者として末岡精一氏沒し、菊地安氏沒し、岡山兼吉氏沒し、原田豐吉氏沒し、澤井廉氏沒し、高僧として大谷光勝師沒し、眼科醫として須田哲造氏沒し、漢法醫として淺田宗伯老沒し、畫家として高橋由一翁沒し、和學者として久米幹文氏沒し、實業家として曲田成氏沒し、小泉信吉氏沒し、人力車發明者として秋葉大助氏沒し、靑年文學者として北村透谷氏沒し、檀林派俳諧の宗匠として夜雪菴金羅翁沒し、舊日本の小說家として假名垣魯文翁沒し、劍客として榊原謙吉氏沒したり。又外邦人として露國皇帝崩じ、金玉均刺さる。

## 明治廿七年に別る

光陰は人を驅て又もや歲尾に到らしめぬ。明治廿七年は今や吾人と手を分たんとするなり。而して吾人は今此歲と手を分つに當りて、坐ろに其一年を回顧するを禁ずる能はず。之を回顧するに當りて、生れて此の幸福なる明治廿七年に遭遇し得たるを慶せざる能はず。」明治廿七年は實に日本人民が千載に記憶すべき歲なりき。何となれば明治廿七年は日本第二維新の第一日なればなり。

第一維新は明治の初年に成されぬ。然れども第一維新は受動的維新なりき。所謂智識を世界に求むるものにして、內地を充實するが爲に世界の智識を輸入し、以て完全なる獨立自主の資格を作る爲の維新なりき。即ち實力養成の緒に就きたる維新なりき。

而るに日本の國力は、其後之が世界的訓練の下に養成せらるゝこと茲に三十年にして、其實力已に大に用ゆるあるに足るや、大旅行若くは短艇航海の如き冒險的舉動頻りに國人に賛歎せられ、國民脾肉の歎漸やくに高く、一轉して國民大同盟の口より自主的外交の叫び叫ばるゝに至りたり。故に自主的外交の叫は明かに國力充實を告白したる宣言なりき。

此くの如く發動的運動の準備全たく成るや、隣國の亡滅を扶植するの機會に乘じて膨脹的事實着手せられぬ。大支那國に向て宣戰の告知は發せられたり。之を第二維新の着鞭とす。

去れば第二維新は外に向てなさるゝ維新なり。第一維新は勢力蓄積なれども、第二維新は勢力應用なり。第一維新は養成なれども、第二維新は實行なり。乃ち養成は實行の準備なるが故に、實行は準備の成就なり。

第一維新は第二維新に由て成功せらるゝなり。

明治廿七年は實に此の第二維新着手の日に當る、吾人焉んぞ特書して此の千載の一時を紀念せざるを得んや。

精しくいへば、客年頃より、著しく社會の問題が成熟社會の標徵たる家庭的のものに向ひ、其極或は演劇の流行とならんとし、或は官紀振肅の叫となり、後藤伯の如き、齋藤修一郎の如き、爲に其職を辭するの止むべからざるに至れり。文學さへも知らず識らずの間に少年文學の繁昌を見んとする傾向生じたる程なりき。

又相馬騷動の獄が如何に大に天下の注意を喚びたりしかを思ふべし。朝鮮刺客の獄が如何に大に社會の視聽

を傾けしめたるかを思ふべし。蓮門教其他の淫祠が如何に大に世の問題となりしかを思ふべし。孰か社會が其漸くに內實したる徵候として爲すあるべき問題なきに苦みたる徵にあらざらん。換言すればこれ實に脾肉の歎なりしなり。

啻にこれのみにあらずして、日本の智識は科學界に於て已に世界に打勝たんと欲する徵候を顯はしたりき。我軍隊が清國軍隊に打勝つに先ちて、北里柴三郎氏等は智識世界の勝利者たらんとしたりしを見よ。之を此歳の上半期とす。

然るに機會は來りき。脾肉の歎に堪へざりし日本は、一の大好問題を隣國に於て見出せり。朝鮮に東學徒の亂ありて漸く大に騷亂せんとするや、清國は之に乘じて藩屬の實を朝鮮に擧げんとて兵を牙山に送りたるに逸早くも我兵は仁川に上陸したりき。

斯くて七月廿五日に於ける南陽灣頭の海戰となり、八月二十九日の牙山成歡の役となり、九月十五日に於ける平壤の大戰、十七日に於ける黃海の激戰となり、十月二十六日に於ける九連城の略取より鳳凰城の占領となり、十一月廿一日の旅順口大奪取、十二月十三日に於ける海城の占領となり、而して勝利の野は常に我軍の手に殘されたること、人皆之を知る所の如し。

之が爲に日本人は各自家の價値を見出し、自家の力を信ずるに至り、思想の版圖は始めて總ての國民の間に世界的とならんとせり。

加之、戰爭の贈物として、虛禮虛儀の打破となり、階級の打破となり、社會に於ける技倆と位地とは次第に其釣合を得るに近かんとせり。又愛國の志氣大に發暢せられて、幾多の道德的標本は此間に於て作られんとせり。我が軍隊がよく文明の兵なりとして世に歎美せらるゝのみならず、我が國內に於ける犯罪者の數さへも已に大に減じたりといふにあらずや。

一の活動は多くの善行を作ふ。流るゝ水の腐らぬを見よ、有爲の時代は總ての事に於て有爲なるものなり。嗚呼我が喜ぶべき明治廿七年よ。吾人は今此の千古に紀念すべき大なる歳に別るゝと共に、加幾倍の大なる責任を帶ぶべき歳は、數日の後に來らんとするを覺悟せざるべからず。已に來りたる歳は第二維新着手の歳なれども、將さに來るべき歳は之れが成功の歳ならんとす。故に第二維新の成ると成らざるとは、已に來りたる歳にあらずして、將さに來らんとするの歳にあり。將た更に其の後に來らんとする歳にあるやも未だ知るべからず。我が健全なる讀者よ、願くば相共に此の幸福なる歳を送りて、更に大に幸福なる歳を迎ふるを勉めん。天は自ら助くものを助くと云へり、請ふ爾が自家の力を信ぜよ。

# 明治廿七年に於ける日本思想の產物

## 一月

三体詩評釋中卷（野口寧齋著）
戊辰戰史第一卷（川崎紫山著）
淨瑠璃史（寺山星川著）
社會文庫第一編（博文館發行）
國民文庫第一編（博文館發行）
日新叢書第一編（八尾書店發行）
婦人のかゞみ（松村介石著）
銀行正鑑

新撰歷史字典
近世名家碑文集（横瀬貞著）
俠客春雨傘（福地櫻痴作）
山中源左衛門（塚原澁柿園作）
村上義光錦旗風（山田美妙作）
有馬紀（饗庭篁村作）
學園
くらべ馬

新評戲曲（依田學海著）
異國漫遊瓜太郎物語（岡本昆石作）
日本漂流譚卷二（石井民司著）
幼年玉手函
君子國第一號（雜誌）
さゞ浪第一號（雜誌）

## 二月

養蠶業全書（吉池慶正著）
經濟學史（濱田健次郎、伊勢本一郎譯）
英國撰舉犯處罰法（法制局編）
統計之神髓（吳文聰著）
西鄉南洲（北村紫山著）
女德寶鑑（安積五郎、田中登作著）
新撰日本外史（完結）（小中村義象、落合直文著）
英國々會政治（林田龜太郎、岸清一譯）
最進派經濟學（山本兼太郎譯）
美術評報（久保田米僊著）
朝日叢書內地雜居（高橋健三著）
省亭花鳥（渡邊省亭著）
明治歌集（佐々木信綱編）
文章字典
深見笠（村上浪六作）
柴車（川上眉山作）
大日本週報（雜誌）
東京文學（雜誌）

## 三月

新文詩（森春濤遺稿）
日本文典（林甕臣著）
日本賢女百人傳
文學斷片（德富猪一郎著）
第二之維新（入見一太郎著）
哲學變遷史（平民叢書）
標註枕草子（萩野由之標註）
銀婚式賀草
銀婚盛典（大槻修二、原田眞一編）
日本女子書翰文（大和田建樹編、小野鵞堂書）
佛和字彙（中江篤介、野村泰亨譯）
草木六部耕種法（佐藤信淵遺著）
日本淨瑠璃叢書（山田美妙編）
三百諸侯第一編（戸川殘花著）
德川太平記（小宮山綏介著）
英文忠臣藏（井上十吉譯）
戰國時代（松井柏軒）
國民修身叢話（博文館發行）
植物學讀本（大谷津直麿著）
中等教育支那歷史（岡田長次郎、熊田子之四郎著）
浮世見物（福地櫻痴作）
小說百家選（春陽堂發行）

## 四月

サイベリヤ地理（參謀本部譯）
三百年後之吾人（加藤弘之著）
懷往事談（福地源一郎著）
責任內閣（深井英五著）
湖上の美人（鹽井正男譯）
商人鏡（橫井時冬著）
消息文變遷（橫井時冬著）
論理新論（渡邊文次郎譯）
谷文晁本朝畫纂大全（博文館發行）
光琳百圖（博文館發行）
道德學大原論（中江篤介譯）
第四國民小說（民友社發行）
エマルソン（北村門太郎著）
馬鹿趙高（三宅雪嶺著）
基督教及佛教（警醒社發行）
文學者となる法（三文字屋金平著）
家計簿記學（石橋多喜郎著）
眼科全書（井上達七郎、諸角芳三郎譯）

醫學字典（川村正治、宮地長治譯）
日本海運論（日本經濟會發行）
通俗教育全書（完結）（博文館發行）
漢文學講義錄（完結）
海外殖民論（恒屋盛服著）
普通國文讀本（竹中以信著）
明治節用大全（博文館發行）
學科全書第一篇（博文館發行）
應用藥物學（眞瀨桂次郎譯）
京橫商工業雜誌第一號（雜誌）
佛教史林第一號（雜誌）
明治詩文學會雜誌（雜誌）
中央時論第一號（雜誌）
支那學第一號（雜誌）
少年史海第一號（雜誌）
東洋哲學第一號（雜誌）

## 五月

日蓮記（福地櫻痴作）
支那文明論
我國之前途（渡邊修二郎著）
盲詩人（長澤別天樓著）
地理學考（内村鑑三著）
千人文集
日本會計法規大全（古川浩潤、安藤三喜之助編）
自主的外交（民友社發行）
俳諧史傳（小柴信一郎、布川孫市著）
歷代文學（關根正直編）
文學格（中島幹事著）
送假名法（官報局編纂）
森林保護學（中牟田五郎著）
排佛教（木村鷹太郎著）
蕉翁俳諧秘錄
立正安國論（田中智學註解）
古今史談（春陽堂發行）
近松時代淨瑠璃（丸善發行）
僻の自休（村上浪六著）
日本名勝地理（野崎左文編）
有韻詩人（幸田露伴作）
西鶴全集（博文館發行）
風來山人傑作集（博文館發行）

## 六月

威氏租稅論（家永豐吉、關澤昌貞譯）
黑死病論（高田耕安著）
國民的大問題（人見一太郎著）
英文法學（井上歌郎譯）
惠智遊（電友社發行）
朝鮮彙報（東邦協會發行）
支那彙報（東邦協會發行）
日清露三國關係（中原邦平著）
家庭之和樂（民友社發行）
日本刑法論（岡田朝太郎著）
南島探檢（笹森儀助著）
婦人のてかゞみ（寒澤操作著）
日本品鑑（瀧和亭著）
德川武士銘々傳（戸川殘花著）
國際公法（石川錦一郎譯）
選擧原理（龜井英太郎譯）
日本大辭林（物集高見編）
史海（田口卯吉著）

帝國財政革新論綱（財政革新會發行）
佛教文人傳（加藤熊一郎著）
大學或問（經濟雜誌社飜刻）
博物學教科書（平澤金之助著）
處世與秘錄（練木默堂著）
リヒテル氏無機化學（高坂駒三郎、金田義一郎譯）
朝鮮國全圖
日本軍歌（納所辨次郎著）
明治法典（丹羽五郎編）
新撰人身生理（英秀三著）
戀愛錄（山口晶譯）
人物と文學（上野雄圖馬著）
英文獨習法
隣の女（尾崎紅葉作）
當世女學者（松居松葉譯）

## 七月

天然と人（德富猪一郎著）
ジョンソン（內田貢著）
朝鮮全圖（地學協會編輯）
ピット（高木信威纂譯）
耶蘇基督起原史論（大原嘉吉譯）
朝鮮雜記
經濟學粹（經濟雜誌社發行）
淸國地誌
藩翰譜（白石社發行）
大戰爭
文祿慶長朝鮮役（博聞社發行）
日韓交通史（服部徹著）
日本普斷（鹽谷漣編）
迹の露（石橋忍月作）
法學速成
宋學概論（小折司氣太著）
朝鮮志（足立栗園著）
政事及び經濟
夏の家庭（民友社發行）
朝鮮革新策（川崎柴山著）
北支那朝鮮探撿案內（波多野承五郎、杉山虎雄著）
近世物理學（水島久太郎譯）
太淸國軍備總覽（長谷川雄太郎、七里恭三郎著）
紀行文集（櫻井平吉著）

## 八月

選屆氏黴菌學（宮岡為次太、伊藤長三郎譯）
日本大文典（落合直文著）
監獄學（小川滋譯）
江戶時代戲曲小說通志（鹽木園主人編）
白晳人種之前途（民友社發行）
援韓雄畧（依田學海作）
日韓合話（參謀本部編纂）
日淸會話（參謀本部編纂）
朝鮮塙名案內（津田仙著）
修德叢書（松平直亮編）
共礩自笑傑作集（博文館發行）
日本農學書（森要太郎著）
政談（經濟雜誌飜刻）
支那征伐の歌（佐々木信綱作）
鵜林の風雲（小松運著）
幕末時變錄
洛克氏教育論（原豐作譯）
權利競爭論（宇都宮五郎著）

西郷隆盛傳（勝田孫彌著）
朝鮮名家詩集（青山好惠編）
支那論（竹越與三郎著）
軍歌集（小山作之助編）
日清交戰錄第一號（春陽堂發行）
日清戰爭實記第一編（博文館發行）
支那新地圖（青木恒三郎著）
採炭捷徑（石坂勘一郎著）
朝鮮時事（櫃瀨中之佐著）
教育史教科書（秋鹿見橘著）
遠征漁業策（片岡茂著）
玩具と遊戲（民友社發行）

## 九月

德川正教考（吉田東伍著）
紫（尾崎紅葉作）
各種學級教授法（與良熊太郎著）
陸戰公法（原敬著）
新三國志（春陽堂發行）
高橋支那地圖
家庭教育（民友社發行）
明日の戰爭
日清戰爭從軍記
清國新地圖
新撰支那地圖
見切物（齋藤正太夫作）
海上萬國公法（藤田隆三郎著）
七十一番歌合（經濟雜誌社飜刻）
漁業論（早川鐵治、二宮熊二郎著）
の將來（田川大吉郎著）
東邦關係（渡邊修二郎著）
國文叢書（關根正直編）
寫眞自在（佐藤渾譯）
獨佛戰史（萬國戰史第一編）（川崎紫山著）
大院君實傳（山中峯雄著）
朝鮮地理誌（太田才次郎著）
支那通覽（山中峯雄著）
海運新誌第一號（雜誌）

## 十月

新編教育學（湯本武比古著）
德川光國（奥田源三著）
戰爭哲學一斑（井上圓了著）
征韓論抄
日清軍記（民友社發行）
英米比較憲法論（松岡參太郎譯）
萬國戰時公報（有賀長雄著）
啞の涙（福地櫻痴作）
北清事情（原田藤一郎著）
日清韓實測正圖（松本德太郎著）
透谷集（女學雜誌社發行）
名人忌辰錄（關根只誠遺著）
三躰詩評釋（野口寧齋著）
征清錄（依田百川著）
支那帝國地理（岩城眞太郎譯）
化學教科書（池田菊苗譯）
化學原論（近藤會次郎譯）
對清意見（荒尾精著）
清俗紀聞（中川忠英著）
明治軍人譚（臥龍逸士著）
小兒養育（民友社發行）
豐太閤征韓秘錄（松本愛重輯）
日清戰鬪畫報（久保田米僊父子著）
征清畫談（武内桂舟畫）
明治文學史（大和田建樹著）
日清戰史（鹽島仁吉著）
日本風景論（志賀重昂著）
日清寫眞畫報（小川一眞著）

通論理學(清野勉譯)
征清戰記(服部誠一著)
輸入日清戰爭錄
歐洲新政史(東邦協會發行)
加藤清正(江見水蔭著)
朝鮮紀聞(鈴木信仁著)
東洋大戰史(警醒社發行)
少年日本史(學齡館發行)
家庭衛生(民友社發行)
安田作兵衛(村上浪六作)
日清海陸將校列傳(中利通著)
少年と戰爭(佐竹萬三著)
新井白石(山路彌吉著)

## 十一月

臺灣志(足立栗園著)
北支那雜記
契沖阿闍梨(宇田川文海著)
近松門左衛門(塚越芳太郎著)
明治軍歌
婦人科準繩(柴田耕一、平山諒吉譯)
日清事件新小說(村上浪六著)
忠勇叢誌
本邦教育史(大東正普著)
戰時教育策(伊能嘉矩著)
珍談倶樂部(春陽堂發行)
英文日本及日本人(内村鑑三著)
最後の勝利(勝山楠洲著)
武談第一編(警醒社發行)
國學院雜誌第一號(雜誌)
祖宗第一號(雜誌)
東亞說林第一號(雜誌)
新日本第一號(雜誌)

## 十二月

北支那三省地圖(地學協會發行)
我邦の基督教問題(横井時雄著)
新撰種痘全書(島村信司著)
對清對歐策(渡邊修二郎著)
有神原論(植村正久譯)
文科講習會第一號(雜誌)



家庭雜誌第四十五號新年發兌のものには、

# 年中行事

を添へ、第四十六號に

# 新年大附錄

を添ふべし。

實用

# 年中行事

一月三日の
## 國民之友に添

一月十日の
## 家庭雜誌に添

都會の事あり田舍の事あり四時折々の執樂遊覽其他百般の行事を敍し俗となく雅となく坐右缺く可からざるの便利なる小冊子紙數六十餘頁久保田米僊、米齋二氏の繪畫十有九箇を挿入す

---

三版 家庭叢書第一卷 **家庭の和樂** 定價十錢 郵税二錢

再版 家庭叢書第二卷 **夏の家庭** 定價十錢 郵税二錢

再版 家庭叢書第三卷 **玩具と遊戲** 定價十錢 郵税二錢

再版 家庭叢書第四卷 **家庭教育** 定價十錢 郵税二錢

再版 家庭叢書第五卷 **小兒養育** 定價十錢 郵税二錢

再版 家庭叢書第六卷 **家庭衛生** 定價十錢 郵税二錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第1回配本（第1～5巻）

1986年10月25日 発行

定価 90、000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。